學友會（報國團）記
同窓會（富丘會）記
回想錄

學友會記

學友會記を「學報」の記事から轉載する方法によつた。ただ「學報」は昭和三年六月三十日に創刊されたので、開校第一年の大正十三年から昭和二年五月までは編者の日記によることとした。

大正十三年

三月三十七、八、九日、第二回入學試驗擧行。横濱、東京、京都、金澤の四ケ所で試驗す。

四月二十二日　第二回入學式を行ふ。

九月一日　震災二周年。午前十二時五十八分號砲汽笛梵鐘の響を合圖に諸車一分間停車、市民默禱を捧げる。

十一月二十二日　國際聯盟協會横濱高商學生支部國際經濟研究會發會式を本校（高工假校舍）にて擧行した。一年生市川泰次郎君の斡旋により組織されたるもの。支部長德增教授。當日の講演は次の如し。

歐米財政事情　財務官　森　賢吾氏

國家人と國際人との調和　早大教授　內ケ崎作三郎氏

大正十四年

一月三十一日　國際經濟研究會講演會を開催、新渡戸稻造、林毅陸兩博士の講演を聽く。

二月二十三日　學友會誌第一號發行。
三月五日　下田教授、デヴィス講師送別會。
同　十二日　下田教授渡歐。
同　二十五、六、七日第二回入學試驗を行ふ。
同　二十七日　高工教職員を招き、お別れ會を開く。午後、本校新校舍へ移る。四月一日事務開始。
四月六日　軍事教育案（配屬將校による教練實施）につき教官會議。
四月十三日　入學式
同　二十五日　國際經濟研究會講演會、穗積重遠博士の「フーゴーグロチユースの國際心」。
同　二十九日　昨年開始したるルソー研究會再開。
五月一日　高谷道男氏の聖書講義開始　毎金曜日放課後。
同　十日　天皇皇后兩陛下御成婚二十五年記念式典。
同　十九日　プロゼミナール開始。
同　二十二日　國際經濟研究會研究講座第一回開催。外務省塚本毅氏講演。
同　三十日　講演部第一回大會、高谷道男氏、堀光亀教授の講演を聽く。
六月一日　神戸商大坂西由藏教授の「工業國の理想」なる講演があつた。

同　十日　岡田文部大臣來校。
同　三十日　對高工野球戰應援團發團式。
七月一日　對高工野球戰第一回定期戰。雨で中止。翌二日擧行四A對三にて本校惜敗。
同　十四日　十四日より二十四日まで毎朝七時―九時の二時間、國際經濟研究會の夏期原書講讀會開催。
同　二十一日　學友會誌第二號發行。
九月七日　大竹絲講師來任。
同　十四日　スタンフオド大學教授市橋氏の英語演說。
十一月十五日　第一回陸上運動會開催。
十二月四日―五日　高工と對抗して野外演習。
同　九日　上田貞次郎博士講演「商業の社會的機能」。

大正十五年

五月十一日　夜學部講義開始。
六月九日　國際經濟研究會講演、下村宏氏。
同　十一日　早大新人との野球、二對二引分。

同　十九日　講演部大會、青柳篤恒氏「反省の日本」。
七月一日　第二回對高工野球定期戰、五對四にて勝つ。
十月二十日　校旗奉戴式擧行。
同　二十一日　開校式擧行、岡田文相臨席。
同　二十二日　兒玉謙次、福田德三博士の講演。
同　二十三日より二十六日まで開校記念各部大會開催。
十二月十四日　賀川豐彦氏の講演あり。
同　二十五日　天皇陛下崩御。
同　二十六日　「昭和」と改元。

昭和二年
一月十一日　學友會雜誌第五號は二百三十八頁の「開校記念號」として發行。
二月七日　御大葬、校庭にて遙拜式擧行。
三月十五日　第一回卒業式擧行。
五月十二日　下田敎授留學より歸朝。

同　十四日　渡邊敎授渡歐出發。
六月三十日　高商新聞創刊さる。主筆、坂本四郎。
六月（第一號）
○盤業講演會開催。水上競技部創設。部長下津屋助敎授。
○學生、濱谷源藏君の「ウイリアム、ゴドウイン」論說掲載。
○發刊の辭及「發刊に至る迄」が第一面を占む。
七月（第二號）
○第三回高工野球定期戰一對零にて惜敗。バツテリー丸橋中島博。
○證研相談會開かる。學報に「研究室めぐり」載り始む。
九月（第三號）
○寄宿舍の實現其緒につく。圖書館の設備大に改善さる。
○帝大野球聯盟主催高專關東豫選大會にて準決勝戰に高工と顏が合ひ、一對零にて本校敗退。
十月（第四號）
○成人講座、市民講座開催。
十一月（第五號）「横濱高商新聞」は「横濱高商學報」と改題

○對早大新人野球戰に接戰十二合、五A對四にて本校勝つ。

十二月（第六號）

○一年生越村信三郎君の現地調査に成る「飛驒白川大家族制度の研究」載る。次號に續く。

○宗教大講演會。來馬琢道氏の「禪宗徒の信仰」鷲尾順敬博士の「國史教育と佛教」。

○國際經濟講演會、上田貞次郎博士、田中貢博士講演。

○關東高商聯盟リーグ戰に劍道部優勝す。

○十月二十七日第一回同窓會總會開催。

○十一月三日を明治節と定めらる。

昭和三年

一月（第七號）

○「行く先は何處」の見出しで本年度卒業生就職の見透が香しからぬ記事あり。

○野球、横濱倶樂部生る、先輩と現部員とより組織さる。

五月（第八號）

○學生の論稿「資本主義經濟學の思想的背景」、「階級闘爭と協調」載る。

○光井教授四月二十六日渡歐。

○勅員令下り、圖書課增田彌之助氏學生三人應召。

六月（第九號）

○岡野教授司會學術研究討論會開催。「中等階級の覺醒運動」が討論議題

○第一回寮祭行はる。

七月（第十號）

○第四回對高工野球定期戰、四對二にて本校勝つ。バッテリー丸橋中島博。

昭和四年

一月（第十四號）

○「いつも變らぬ卒業期の悶へ」不安增す就職難の記事あり。

○講演部は昨夏巡回講演をした。

四月（第十五號）

○商學會組織さる。

○學友會費値上、年額十二圓となる。

○水泳部獨立す。

五月（第十六號）

○井上龜三教授三月三十日渡歐の途につく。

○劍道部主將笠原善一、神奈川縣代表として御大禮記念天覽試合に出場。

六月（第十七號）

○文部省學生部を設けて思想取締に乘出す。

○對高工野球定期戰無期延期となる。

○第三回對高工競技戰引分。

七月（第十八號）

○野球部高專關東豫選大會に日大を九對三で擊破し、甲子園の全國大會へ進出。バツテリー宮崎、廣見、中島博

○對高工定期戰に籠球部優勝す。

○水泳部四專門對抗大會に再度優勝す。

○國際經濟研究會講演會、神川彥松教授、千葉龜雄氏、前田多門氏の講演あり。

○文部省にて思想善導講演會開催、高田保馬教授「マルクシズムの經濟學的批判」を始め土方、牧野、中村孝也諸教授の講演あり、生徒監出席聽講す。

十月（第十九號）

○開校五周年記念行事行はる。日本交響樂協會の祝賀音樂會開催。豪華版である。

○校歌成る。

十一月（第二十號）

○體育會第一聲を擧ぐ。

○校長渡歐につき同窓會各所で送別會を催す。

昭和五年

七月（第二十五號）

○一橋專門部會との對抗綜合競技會開催と決定。第一回大會に優勝。

十一月（第二十七號）

○講演部文藝講演會を開き長谷川如是閑の講演を聽く。

昭和六年

五月（第三十一號）

○對高工野球定期戰復活決定。應援團結成さる。團長磯匠。

六月（第三十二號）

○定期戰に宿敵高工を破る。第一回戰　本校一二A-五高工。第二回戰　本校六―三高工。バッテリー　宮崎、荒木、宇佐美、武富。野球部の黄金時代で宮崎選見が本壘打を飛ばす健棒と怪腕投手荒木と守備陣の堅實は超絡級のチームであつた。定期戰の人氣はすばらしいが此の年は殊に素晴しく、入場券は十八分間で賣り切れたと報ぜられてゐる。

七月（第三十三號）

○對一橋專門部綜合競技會で本校六―專門部三の記錄を以て再び優勝す。

十月（第三十四號）

○野球部夏の滿鮮試合旅行記を載す。

○講演、河合榮次郎氏「英國勞働黨の社會思想」。

○講演部、前滿鐵理事爾藤良衞氏を招き、滿蒙問題を聽く會を開く。

十二月（第三十六號）

○市內五專門學校に學生英語聯盟生る。

○外語劇にスペイン語劇加はる。西語劇「罪は若きにあり」、獨語劇「ウイリアム・テル」、佛語劇「アルルの女」、英語劇「息子」上場。

○米國職業野球團と試合、投手荒木の球も問題でなく打捲くられ、之に反して米國投手グローヴの「スモークボール」には流石の野球猛者連手も足も出ず、醜弄されてしまつたが、專門學校で、試合したのは本校だけであつたから、野球部の黄金時代が偲ばれる。

昭和七年

一月（第三十七號）

○「就職率第一位の牙城にも吹き捲る不況の嵐」。

六月（第四十號）

○下田敎授南米へ、下瀨屋敎授體操選手監督としてロスアンゼルスのオリムピツクへ出發確定。

○對高工野球定期戰本校勝つ。第一回戰　本校三A―二高工、本校勝。第二回戰　本校一―四高工、高工勝。第三回戰　本校一〇A―一高工、本校勝。バッテリー　五十嵐、宇佐美。

七月（第四十一號）

○講演部主催第二回全國大學專門學校講演大會開催。

○佛敎青年會圓覺寺居士林に參禪。

○對一橋定期戰は二ケ年で中止と決定。二年連續獲得した優勝旗は、兩校委員の手で、多摩河畔で燒却した。

十一月

○敎練御下調べに朝香宮殿下御來校。

○農林省生糸販賣統制案に對する諮問機關として生糸販賣制度委員會開催。德增敎授特別委員として統制具體案を提示す。

○講演部主催「非常時對策講演會」に於て、內閣資源局宮嶋信夫課長の「國家總動員準備について」及小川鄕太郎博士の「現下の不況と非常時不況と非常時豫算」の講演があつた。

○映畫研究會、座談會に見學に盛んに活躍す。

○第一回校內體育大會開催、綜合競技の結果三年C組優勝す。

十二月（第四十四號）

○朝香宮殿下敎練査閲に御來校。

○プロゼミナールに三グループ制採用。Aグループ私經濟學Bグループ國民經濟學Cグループ法律學とし、第一志望者が十五名を超すときは同一グループ內の第二志望へ廻すこととして一部門への志望者偏在を避ける方法を講じた。

○小谷惠一郎助敎授急逝。獨逸語敎官として稀に見る優秀豐富な語學力を以て學生を指導したことは勿論、記憶力は聊か常人を超して驚嘆すべきものがあり汽車の時間表を立ち所に暗記してしまふといふ手品師的才能を持つてゐた。頗る諧謔性に富み、接する人々から好かれ親しまれた。三十三歲の若さで逝かれたのは洵に惜みて餘りある。

○劍道部、關東高商大會に優勝。

昭和八年

一月（第四十五號）

○求人申込百二十餘、昨年より五割の增加で、「インフレ謳歌時代來る」。

○昨年中の運動各部の總決算記揭載。野球、卓球、弓道、劍道、蹴球各部の戰績優秀であつた。

四月（第四十六號）

○福田要、山中靜三、越村信三郎三講師新任。

○中島周平寮監退職さる。

○ラグビー部獨立す。

五月（第四十七號）

○校醫松岡博士を迎へて「健康相談」開設。月二回健康相談を受く。

○應援團結團式。團長滂水喜代造。

六月（第四十八號）

○對高工野球定期戰。三年連勝、第一回戰本校勝。本校七Aー一高工。第二回戰高工勝。本校七ー八A高工。第三回戰本校勝。本校五Aー〇高工。バツテリー　五十嵐宇佐美。松內アナウンサー實況放送をする。

○陸上競技對高工定期戰三八對一九で本校勝。四種目に全勝。

十一月（第五十號）

○學報第五十號發刊。內容愈々整ふ。

○內山生徒主事、母校福井縣立大野中學校長に轉出さる。

○第二回校內體育大會にて綜合競技の結果、一年A組優勝す。

○橫濱市內專門學校弓道聯盟結成。

十二月（第五十一號）

○岡野敎授、生徒主事となり、南種敎授寮監となる。

○第六回卒業生宮川保君、北滿に共匪討伐中十一月七日名譽の戰死を遂ぐ。始めての悲しくも勇ましき記錄である。

○學友會脫衣所を造る。

○排球部縣下選手權を獲得。

昭和九年

四月（第五十三號）

○「謳歌せよ丘上の春」、就職率九七%。

○富成喜馬平講師來任。

五月（第五十四號）

○井上鎚三敎授歐洲留學より歸る。

○高商浴衣復活賣出す。昭和六年まで賣り出されてゐたのが一時中止。ここに復活す。一反一圓五十錢。

○海外卒業生よりの寄稿、三面を埋む。

六月（第五十五號）

○同窓會、會館設立、プール建設を計畫す。

○井上鎚三敎授蠶糸業行詰り打開を企圖する蠶糸調查會委員となる。

○對高工野球定期戰四年振りに敗る。第一回戰本校勝。本校五Aー一商工。第二回戰高工勝。本校三ー五A高工第三回戰高工勝。本校〇　ー八高工。

七月（第五十六號）

○佛教青年會宇野圓空博士を招いて「日本民族精神と佛教」の講演を聽く。

○劍道部、五專門リーグ戰に優勝す。

○弓道部市內學生リーグ戰に優勝す。

十月（第五十七號）

○開校十周年記念事業の一たる物故教職員生徒七十六名の慰靈祭、十四日擧行。

○簡單な「學園十年史」揭載。

十一月（第五十八號）

○十周年記念式擧行。松田文相臨席。文相、横山知事、大西市長、佐野商大學長、渡邊名古屋高商校長、有吉商工會議所會頭、ボイスアメリカ總領事の祝辭があつた。續いて十年勤續教職員二十二氏の表彰式に移る。午後は安達謙藏、出淵勝次兩氏の講演があつた。夜は提灯行列。

十二月（第五十九號）

○外語劇開催。西語の「デメトリオ・モンターノ」支那語の「五祖と六祖」、英語の「ヴェニスの商人」、獨語の「世襲山番人」、佛語の「スカパンの詭計」。

○待望の山岳部成立。

○劍道部、關東高商大會、四專門リーグ戰に優勝。

○謠曲鼻鳴會は設立年久しいが教授四名、學生三十名の會員で盛況を極めてゐる。

○ハーモニカ部第一回街頭進出。

十　年

一月（第六十號）

○謳歌せよ！就職の春　既に過半數採用決定。別科生に春は朗らか、本科を拔く就職率。別科生二名南米へ、第一回商業實習生として外務省の嚴選にパス。

○非常時の笛に踊るもの吟詠會の誕生。

○生徒課苦心の調査　學生諸統計成る。

四月（第六十一號）

○論說「聚精一番」と題して、就職率百パアセントに甘んぜず天下の模濱高商たるに恥じざる名實完備の學園にせよと主張す。

○徹宵に躍動する白亞　就職率百パアセント一流所を網羅して　質の向上目覺し。

○YCCの教壇に新味加はる　富成助教授の人間論と越村（商業通論）石島（國漢）兩講師初講義。

五月（第六十二號）

○臥薪嘗膽ここに一年、應援團結團式擧行（五月十日）。團長小山喜規。

○小野（尙太郎）、木谷（洋左右）の兩君ハーモニカ獨奏コンクールに見事優勝の榮。

○野球部今春の戰績　對早大二軍九對七本校勝。對桐生高工九對四本校勝。對藤倉電線四A對三本校敗る。

○競技部　對慈惠豫科戰三三對二四本校勝つ。

六月（第六十三號）

○論說「偉大なる收穫」と題して、定期戰には敗れたが、學園全體の融合調和を祝福する。

○吾々の讀書傾向　產業經濟が斷然多い。圖書館のお蔭を蒙るもの一日平均一三五人、讀まれる本の數は一八〇冊前後、本校は藏書數は少く、全國高商中最下位で、最上位の山口高商の四分の一とは情ないが、讀む人と讀まれる本の數は第一位で、二位の山口高商の二倍ばかり、使用價値の大なること滿點。

○YMCA本校の活躍　高工關東學院高商部と提携して、市內專門學校基督敎靑年會聯盟結成、六月八日發會式を擧ぐ。

○敎授訪問記載る。第一回森田敎授訪問記。

○野球部　對高工定期戰　武運拙く惜敗す。試合經過　第一回戰　高工四：三本校、第二回戰　高工三A－一本校。然かも二年連敗。バッテリー前、西山。

○庭球部　對高工定期戰本校七－高工二　本校勝つ。

○水泳部　對高工第一回定期戰　二中プールに於て擧行、高工七七－本校五二　敗る。

○卓球部　對大倉高商定期戰　本校四－大倉高商三　本校勝つ、合宿の効あり。

○弓道部　市內四專門リーグ戰　横專、商專を破り、高工を七九中－六三中　その差十六中にて擊破、昨年に續いて優勝。

七月（第六十四號）

○森田敎授の「佛貨の動搖と金ブロックの將來」なる時論揭載。

○論說「學生の自覺を望む」と題して、本校の學生が秀才を恃み、就職率の良きに滿足して研究心足らざる憾みなしとせず、自發的により研究慾を勃興せよと叫ぶ。

○本校の產婆役で、全國實業專門學校野球聯盟結成さる。高專野球大會解消。

○岡野部長引率の下に講演部信州地方巡回計劃發表。

○佛敎靑年會例年の如く古川堯道師について圓覺寺居士林に參禪、七月十二日より五日間。西村敎授「禪の初心者の爲めに」を載す。

○籠球部　苦節五年高工を下す　高工三九－本校五六。五專門リーグ戰では四勝四敗で關東學院、高工に次ぎ三位。

○蹴球部　對高工定期戰　六―五にて惜敗。

十月（第六十五號）

○ここ毎號、岡野生徒主事執筆の「主事室だより」掲載。生徒主事としての注意と抱負を述べてゐるが、この號では就職運動に血眼になつて授業が怠慢になるのを戒めてゐる。

○在獨感想「失業の社會惡」を井上鐵三教授（筆名大森三彌）が載せてゐる。

○「來年度の卒業生まづまづ安心して可なり」。申込殺到に學校當局狼狽の態とある。

○開校記念講演會　阿部賢一氏「日本經濟の彈力性」。

○巢籠會（尺八同好會）演奏、創立以來十年の歷史を持ち第十回演奏會を本校講堂で開く。

○卓球部　全關東リーグ戰に優勝杯獲得。

○排球部　關東學生リーグ戰に第三位獲得。對高工定期戰には敗退。

○十月十五日から四日間の演習、習志野に展開、第一日夜間演習、第二日陣地攻防戰、第三日實包射擊、第四日鐵道輸送。高津西廠舍宿營。教官は遠藤中佐、小白勝師。H・S生の吟懷、

　教練に疲れて戻る途の邊に　秋草咲けり習志野の原

　秋雨の降る習志野の夜はふけて　ここにかしこに燈火けむる

十一月（第六十六號）

○就職戰線續報　羽根が生えて飛ぶ。就職希望者百十六名中現在決定者過半數。

○英語討論會生る　スレツシャー教師を議長として隔週續行。今回は十一月八日に開かれ「伊・エチオピア何れにつくべきか」を討論し國際聯盟總會縮圖の如き觀を呈した。

○復活第一回大運動會擧行、十一月一日。

十二月（第六十七號）

○生徒生活調査報告完成　本校生は西郷隆盛がお好き、娛樂では映畫と音樂、酒も少しはいけます。

○外語劇（十二月十四日）本式の衣裝を着け、メーキアップして熱演。佛語劇「服裝が物を言ふ」、獨語劇「平行」、英語劇「ハムレツト」、支那語劇「長恨歌」、西語劇「町の幻」。

○基督敎青年會十周年記念講演　波多野海軍中將の「眞の宗敎と基督敎の本質」。

○本校の提唱で、五專門辯論聯盟結成、十四日開港記念會館で發會式擧行。

○ラグビー部　對高工戰善闘唯涙、對名高商戰には完勝。

○劍道部　全關東高商リーグ戰に破竹の勢にて連勝。

十一年

一月（第六十八號）

○小宮山教授逝く、一月二十三日告別式。眞摯恬淡な生涯を惜しまれる。
○競技部主將梶山正親、日本陸上二十傑中の十種競技第十位にランクされた。

四月（第六十九號）

○成績考査細則一部變更　本年度より再試驗撤廢。
○古館教授大倉商商校長に轉じ、東京帝大に於て社會學及會計學を專攻し、中央大學教授たりし黑澤清講師來任
○古館教務主任の轉出に伴ひ、井上龜三教授教務主任となり、井上龜三教授圖書副主任となる。
○對高工前哨戰に野球部振はず、三勝一引分四敗の戰績。對立命館戰八—五本校敗。對帝大戰三—〇本校勝、對プレーブス戰四—二本校敗、對ロムビア戰四—三本校敗、對明大二—二引分、對東京瓦斯〇　五本校勝、對森永製菓〇—七本校勝、對專修大學四—五本校勝。

五月（第七十號）

○講演部主催擬國會開催。今議會の重要議案たる「退職積立金法案」を中心議題とし、討議參加部員は專業主側代表と勞働者側代表とに分れて論議す。議長岡野教授。
○美術部ノアール會生る。
○ＹＣＣ浴衣、消費組合で賣出す。價一圓五十錢、本染で浪に橫濱高商とロー マ字を配したもの。
○應援團結團式（五月十一日）。團長內藤威。
○卓球部　市內リーグ戰。第二部に優勝、一部への昇格成る。
○籠球部　五專門リーグ戰に高工を屠る。

六月（第七十一號）

○論說「學生論文に就て」と題して、學報が些か低調にあると自責し、先月號より學生論文を第一面に揭出する方針を執つたから、本校の眞價發揚のためにも學報を一段と光彩あらしむるためにも優れたる論稿を寄せよと主張してゐる。
○出席統計成る『本年は香しくありません』と生徒主事室の憂行險惡。
○對高工野球定期戰　連敗三年。今年こそはの復讐ならず。第一回戰高工四Ａ—一本校、第二回戰高工九—四本校。バッテリー　前、大松、下山。三年振りにＡＫは實況放送をした。
○柔道部　對高工戰に六年振り宿敵を陣す。
○弓道部　高工粉碎、四專門リーグ三年連勝。
○水泳部　第二回對高工定期戰　六六—四二敗戰。
○排球部　關東高專リーグに第三位獲得。

七月（第七十二號）

○井上龜三教授を首班とし產業視察團組織さる。足利、桐生機業地見學、七月十二日―十四日。
○市內四專門學校語學部共同主催第一回英語演說會朝日講堂に開催。
○弓道部　强豪商大專門部を一蹴、關東關西大會を制覇せんとの意氣込高し。

十一月（第七十四號）

○同窓會の快擧、プール建設案愈〻具體化。
○學術の日本化、文部省に諸學振興委員會開設。南種、渡邊、富成諸教授出席。
○官立專門學校に日本文化講座開設。第一回は村川堅固氏の「歷史的に見たる日本文化の使命」講演。
○第一回全國高專講演大會を十一月三十一日記念會館に開催。
○全日本體操祭に賞狀を受く。

十二月（第七十五號）

○岡野教授の「滿支を巡る」、井上鎧三教授の「日獨防共協定の學術的見解」、渡邊教授「國字改良から國際語へ」の諸論稿收載。
○校長の還曆祝　十一月二十六日教職員の祝賀會がニューグランドで催され、校長同夫人招待記念品として德富蘇峰氏の書を贈る。學生より銀製紫檀の盆付煙草盆贈呈。
○配屬將校更迭、遠藤中佐去り佐分利大佐を迎へる。
○森田教授獨墺に一ケ年半留學決定、明春三月渡歐。
○五專門當事者の奔走により横濱學生馬術聯盟十一月二十八日結成。
○多年の金城湯地に擴り就職インフレに潰立つ。採用決定既に九割。
○日本文化講座第二回永井潛博士「日本民族」
○教練査閱　成果玆に充實し成績は優秀。
○體育研究會主催室內體育大會は毎年秋體育館で行はれて來たが本年はその第八回である。
太田小學校兒童の轉廻運動遊戲、本校生徒の合同體操、器械體操徒手體操、ベルリンオリムピック大會四選手の演技があつた。
○劍道部　榮光燦たり三年連勝の關東高商劍道大會。
○ラグビー部　對高工定期戰で一四對一の接戰を演じたが六年連敗の雪辱成る。
○「先輩を訪ねて」の欄設けられる。
○高商俳句會は十一月開會以來すでに數回の句會を開いてゐた。東京藥學專門學校教授にして「東炎」の主幹內藤吐氏を師として、時田、井上、富成、德增諸教授、高林、增田兩氏及學生宮坂を世話役とした十數名、水入らずの俳句會である。

季題　枯野　短日

日に遠く枯野の起伏つづきけり　内藤吐夫
白薔薇しらじら庭の日詰りて　井上山紫雄
風寒し枯野に白き月明り　徳増蜜河江
短日や客去りしあとの椅子二つ　時田九冷流
藻の影のわづかに動く枯野川　富成喜馬平
沼明り鋭き枯野風吹きすさぶ　宮坂斗南
枯野原烏一聲鳴きにけり　白井白夏
煙一筋流れ居りけり枯野原　海老根桃源
山頂は夕日まだある枯野かな　杉本幸比古
短日の雲そのままに暮るる峡　石川榮一

十二年

一月（第七十六號）

○入學試驗期に入り、學課は常識本位、體格人物を重視と下田主事談を載す。

○教授有志間に貿易研究會を組織。毎水曜日研究報告會を開く。

○謠曲部　謠曲コンクールに二等の榮冠。

四月（第七十七號）

○學生の論説で紙面活氣溢れる。内田幸平「フイツシヤーの交換方程式批判」、若栄文夫「日滿支經濟提携の必然性」、安西良治「取引稅研究」。

○軍需景氣の高潮に乗り就職率超百パーセント。

○商品學の田尻彦幸助教授逝く。溫厚篤實にして寡言忍苦の性格を持ち、敬虔なる基教信徒であり、日曜學校長でもあつた。樺濱高工應化の出身で、大正十五年卒業と同時に本校に來任、商品實驗、物理化學擔當。享年三十五歳の夭折は甚だ殘念であり殊に老母堂、病夫人、幼き二令嬢を遺されたことは誠に痛惜に堪へない。教職員同窓會學友會は遺兒養育資金を醵出することとした。

○時代の要望に支那語講習會生る。武田助教授が率仕的に藍採みに教授。

○大陸經濟研究會、講演部に新設。

○武市一幸講師來任。故田尻助教授の後任として。徳島高工出身。

○中等學校教授要目改正委員として久しく文部省に改正案を練つてゐた徳増教授は、歴史科講師として高知高等學校の講習會に出張。下田教授も地理科の改正委員であつた。

○弓道部　道場移轉に清新の氣漲る。
○待望久しきブラスバンド誕生、來る定期戰に初登場。
○四專門に率先して卓球部國際式を採用す。

五月（第七十八號）

○學友會の各部豫算會議は每年相當長時間を要するが今年は前後十三時間を費やし徹宵會議を續けて決定した。
○暗雲低迷する時局を反映してカメロン先生幹旋の國際問題研究會第一回例會開く。
○應援團結團式　雪辱の決意固し、團長鈴木三郎。

六月（第七十九號）

○實業專門學校長會議　現下諸般の情勢に鑑み教學の刷新斷行＝文部大臣訓示。
○元本校敎授內山進氏逝く　福井縣立大野中學校長として令名高き同氏は四十五歲で長逝。本校には大正十四年より八ケ年間商工心理と修身擔當、又生徒主事として當時最も問題多き思想對策に苦心した功勞大なるものがあつた。昭和八年鄕里の靑年敎育のため大野中學校長に轉任されたのである。
○プール開き、五月三十日大々的に擧行。日大葉室選手谷口選手の模範泳ぎ市內專門學校選手の競泳があつた。
○對高工野球定期戰　雪辱の銳鋒敵を粉碎、雌伏三年茲に邂逅。不二ケ丘勝利の亂舞、篝火の下に感激の凱旋式

第一回戰本校四Ａ—三高工。第二回戰本校一一—三高工。バッテリー　前、飯島。實況放送（淺沼アナウンサー）「十一對三、十一對三、高商軍の勝、お聞きのやうに高商の應援團破れ返へるやうな歡聲でございます。五色のテープ、五彩の色紙は雨霰と降りしきつてをります。又もや歡聲、この歡聲と凱歌は暫し鳴りやみもしません。勝つた高商のナインは泥と汗にまみれ顏には笑さへ浮べて應援團の前に整列してゐます」。

○競技部　商專に快勝、好調を示す。
○籠球部の殊勳、五專門リーグに優勝。

七月（第八十號）

○月桂樹植樹式　高商精神を遺憾なく發揮した對高工野球定期戰の勝利を永久に記念するため、正面玄關南寄の植込に六月二十三日月桂樹植樹式擧行。
○蹴球部　對高工定期戰に快勝。最初の銀カップ獲得。
○山岳部夏季スケヂュール發表　南北アルプス上越國境附近、秩父連峯踏破行。
○講演部夏季地方巡回講演發く。岡野敬授越村助敎授學生六名。彥根、福井、金澤に於て。

九月（第八十一號）

○世界四十八ケ國の敎育者敎育關係者二千餘名の第七回世界敎育會議は八月二日から七日まで帝大安田講堂で開催。田尻校長は「商業敎育と國際奉仕」の英語講演をした。
○體育、語劇、演奏大會を綜合して全校大會を開催と決定。十一月六、七日擧行。

○防空整備規定制定。
○時局に鑑み寮祭中止と決定。防空訓練實施(十五日)。
○七月十日から二ケ月の滿蒙旅行を終へた渡邊教授の旅行談揭載。
○野球部　關東大會に優勝し(決勝戰本校九A一六高工)、甲子園全國大會にて同志社高商に準決勝で二對零にて敗退。
○國際經濟研究會、再開近し。
十月(第八十二號)
○國民精神總動員の强調週間。
○本校教授の大論陣、戰時經濟講座開く。八日より十六日まで朝日講堂に於て。
○英語教官會議に西村教授、學生三十五名をつれて出席、教授方法のデモンストレーションを行ふ。
○プール公認　水上聯盟公認のプールとして認めらる(八月十六日)
○全校選珠算競技大會に二名二等入賞。
○開校記念名士講演會、前外相佐藤尚武氏最近の國際情勢、前商相小川郷太郎氏非常時財政經濟立法。
十一月(第八十三號)
○同窓會號
○學報第三種として認可(十一月十七日付)
○俳句會句集「荒海」發行さる。
○謠曲部　觀世宗家に於ける全國學生謠曲コンクールに優勝。
○本校に於て始めて試みたる全校體力檢査を行ふ。合格者百七十八名。
○本校水泳選手中村隆男、全日本水泳公認記錄によりCクラスに入る。
○小白講師應召、吉澤準尉後任に來任。
十二月(第八十四號)
○田尻校長、教育審議會臨時委員仰付らる。
○南京陷落祝賀提灯行列參加。
○音樂部　戰傷病兵慰問に活躍。

十三年
一月(第八十五號)
○年頭の辭として下田教授の「時局に對處すべき學生の覺悟」が述べられ、支那事變に於ける學生の報公精神を高唱す。

○支那事變の正しき認識を全世界の學生層に呼びかけるために、國際文化協會設立され、學生宮坂義一の檄文を羽仁謙三がスペイン語に、黒住良一が英語に飜譯して、パンフレットを各國學生層へ發送せんとする。

三月（第八十六號）

○早稲田五郎少尉津浦線沿線にて壯烈なる戰死を遂く。卒業生戰死の始めての報道。

○會長案通り同窓會を富丘會と命名。

○就職豪華版、超百パーセントを示す。本科第十二回、別科第九回卒業式に當り、校長、好況時の卒業に氣を許すなと戒める。

○學報「有保證」となる。學友會の取計ひにより政府に戰時公債を供託した。有保證となれば揭載禁止事項が一々通達される便宜があり時局下これは是非必要であつた。

四月（第八十七號）

○富成教授の「時局と學生」、黒澤教授の「經營計算と戰時經濟的課題」の二論說揭載。

○オリムピック東京大會の準備着々進む。

○横濱高商報國團結成さる。心身鍛錬と勤勞奉仕等五綱領を揭ぐ。

○岡野教授、現職のまま、關東軍參謀本部付、建國大學教授として滿洲國へ赴任。大正十五年九月海外留學から歸朝、直ちに本校來任、財政學、社會政策學教授としては熱辯に學生の血を沸かせ、生徒主事としては身を以て指導に當り學生の心をよく攫んでゐた。

○猪間驥一講師、岡野教授の財政學と統計學擔任。

○主任寮監南種教授、富成教授と更迭。

○ラヂオ體操、正課と決定。

○武田助教授現地へ轉出後、外語の宮越、內之宮兩教授が講師として支那語を擔當してゐたが、兩氏に代り香坂順一氏講師として來任。

○學生の自肅、自戒一年生は斷髮を實行。

五月（第八十八號）

○卒業生小峯登君の「抗日の首都漢口脫出記」揭載。その他卒業生從軍將士の現地報告載り始む。

○比島學生團を招き親善茶話會を開く。

○應援團結團式、團長宮本海。

○待望の映畫研究會復活。

○消費組合三ケ年計畫。五項目の改善要項。

六月（第八十九號）

○井上龜三教授「經濟と法律についての一問題」德增教授「獨墺合邦の經濟的價値」の二論稿揭載。

○長期戰に對應して貯蓄報國强調。

○田尻校長、神奈川地方物價委員を委囑さる。

○庶務課矢島主任、長崎高商事務官に榮轉。創立以來の功勞者。特に就職難時代における就職事務一手引受人であつた。

○國際經濟研究會では實際資料の整理研究を進め、調査部と協力して資料整理の上研究材料として提供せんとする。

○對高工野球定期戰、善戰して敗る。第一回戰高工二三—八本校。第二回戰本校三A—二高工。第三回戰高工八—三本校。バッテリー　岩井、下山。

○水泳部　大倉高商に六七對四一で大勝し、意氣軒昂。

○應召中の越村敎授より送り來れる、入浴中の自寫像入り便り掲載。行水の湯音を包む蛙鳴かな。

七月（第九十號）

○一面の富丘舍の記事、卒業生の消息載る。

○事變一周年、全市を擧る一萬六千、歩武堂々の大行進譜。

○記念日に勅語を賜ふ。翌八日講堂に於て奉讀式擧行。

○靴の脅威、天下晴れて下駄ばき許可。

○青年學校敎員養成所開く。

○水泳部　宿敵高工を擊破、續く五專門リーグに優勝。本校七七點、横專七一點、關東四〇點、商專三七點、高工二五點。

○柔道部　對高工定期戰に勝ち、三年連覇。

○蹴球部　對高工定期戰に連覇、優勝カップ授與さる。

○汗と土に塗れて集團勤勞作業擧行さる。第一集團は箱根畑宿の報國寮に初入寮し、勤勞作業一週間。第二集團は原町田座間間の行幸道路工事。第三集團は本校校庭地均し。尙報國寮ルポルタージュ第四面に掲載。

九月（第九十一號）

○甲子園に於ける全國實業專門學校野球大會に松山高商を破り優勝。本校四　松山三。

○難關で聞えるガイド試驗に三瓶芳朗、出合貢文、羽仁誼三の三生徒合格、免許證下附された。

十月（第九十二號）

○陣中通信に小白敎官からの漢口攻略便り等載る。

○就職治んど決定。未決定僅かに三名。

○體操部　インターカレツヂ二部に於て明大と覇を爭ひ優勝。

○第三外國語新設、三年二學期に於て敎授す。

○「商學」は從來年三回發行されてゐたが發行回數の整理に迫られ、十四年度より年二回發行と變更。
○二十七日武漢三鎭攻略祝賀式を校庭に擧行。
○宿望の寮歌成る。寮生佐藤武敏作詞。
○圖書課の學生讀物調査結果發表さる。新聞では東京朝日斷然多く、書物では「學生と生活」「大地」「學生の書」「若い人」「生活の探求」の順である。
○學報執筆者紹介欄を設ける。
十一月（第九十三號）
○「獨我論所見」なる學生の論說紙面を壓す。
十二月「第九十四號」
○德增教授の「英米通商條約の意味」、香坂講師の「日本語中の支那語」の二論稿掲載。
○第二回文化大會、空前の成功を收む。アルゼンチン公使フランス總領事來場。
○謠曲部　觀世能舞臺に於ける學生謠曲コンクールに第一席を獲得、堂々二年連覇す。
○送別會は會費一圓以內とせよと生徒主事の達しあり。嚴守を望むといふ苦言投書見ゆ。
○五日より十日迄圖書週間として、書庫開放。
○燒夷彈防火演習校庭にて行はる。
○五專門合同音樂會第一回大會開港記念會館に開催。
○高工との合同三曲演奏會本校講堂に開かる。

十四年
一月（第九十五號）
○森田敎授、歐米の新知識を土産に歸朝。
三月（第九十六號）
○搖がぬ鐵壁王座、娘一人に婿八人の盛況といふ就職金字塔。
○日本國際協會の學生論文懸賞募集に、三年生森川保久「日滿支の經濟關係」に一等入賞。
○紀元節にブラスバンドを先頭として伊勢山太神宮へ行進拜禮す。
四月（第九十七號）
○調査部資料の校外搬出許可。
○井上鎌三敎授逝く。大正十四年東京商大卒業と同時に來任。原論を擔當。生糸經濟研究では有數の權威であつた。野球部長としては寢食を忘れて奔走、明るい性格は多くの人に親しまれた。享年四十一歲。
○冠たり體育高商。全國大學高專中體育優秀校として文部省より最初に表彰さる。

○商大突破十六名。又しても全國一。
○山中靜三助教授、香坂順一講師退職。沼田嘉穗、大昌沛の兩氏來任。
○森田教授「海外で逢つた同窓の人々」なる一文を寄す。

五月（第九十八號）

○就職戰線開始、早くも申込殺到。
○第一線の小白敎官惜くも病を得て歸る。
○應援團結團式（五月一日）。團長望月雄二。
○京濱商工界の權威及學界關係者を以て昭和九年組織せる横濱經濟研究會（Y・K・K）は主宰岡野教授轉出後休止してゐたが、今回德增教授主宰調査部中心に新活動に入り、第一回懇談會を開催す。

六月（第九十九號）

○森田教授の講演筆記「ドイツの東進政策」、學生宮永吉平の「ドイツの貿易政策と原料問題」なる論稿揭載。
○現役將校配屬十五周年記念御親閱。
○滿蒙に派遣すべき興亞青年勤勞報國隊參加員決定。
○十三回對高工定期野球戰。熱戰又熱戰、天運我に惠まず惜しや長蛇を逸す。第一回戰高工六—五本校。第二回戰本校一五—四高工。第三回戰高工五—一本校。バッテリー　岩井、下山。

七月（第百號）

○記念增大號。富山高工校長の「兄弟校として更に密接な關係を」、前田商專校長の「祝辭」、白山關東學院高商部長の「學報百號を祝す」等の盲腸揭載。尙、「學報創刊當時の思ひ出」を畔上勝二深澤多喜男兩君が書いてゐるが、學報發刊には專ら「泥壺」同人が當つたこと、發行部數僅かに五、六百部に過ぎなかつたこと等の憶ひ出が述べられてゐる。
○若人の熱と力をこめて集團勤勞作業開始。第一集團、縣道中野線修築工事、第二集團、箱根報國寮、第三集團大雄山最乘寺林道修築工事等。
○事變二周年、校庭にて分列式擧行。

九月（第百一號）

○越村助教授、調査部野口勝利氏歸還。吉濱敎官應召。
○野球部　關東實專大會に横專を六對二で擊破し制覇成る。

十月（第百二號）

○文化大會は事實上分裂。音樂の夕と演劇か。電力使用統制により講堂の夜間使用も問題。
○就職王國の威觀。二旬にして全員決定。
○海運と戰爭（遠沼忠男）、預金貨幣（立石清志）の二學生論稿收載。

十一月（第百三號）

○學生の諸論文、支那大陸現地報告で紙面賑ふ。

十二月（第百四號）

○學科課程改正、教授時數は三十二時間、課目を綜合主義に。明年度より實施。

○卓球部室新築成る。

○講演部は部長富成教授に率ゐられて小田原に講演會開催。

○同志者大學主催高專大學英語演說大會に一年生津田孝太郎出場、二等賞獲得。

○日本文化講座に於て三浦新七博士の「東洋文化と西洋文化」の講演あり。

十五年

一月（第百五號）

○本校出身戰歿者合同慰靈祭一月二十五日擧行。石田光治君外十四柱。

○生徒課崔田保春氏召集解除昨年末歸還。

三月（第百六號）

○白堊の殿堂に憧れて狹き門に競ふ若人千五百人に近く、十人に一人の合格率で創立以來二番目の記錄である。

○二千六百年記念事業の一つとして、逗子櫻山地内に杉檜數千本を植林し學生の勤勞奉仕を以てこの植林をすることとなる。

四月「第百七號」

○渡邊教授「商業廣告研究の將來」、黑澤教授「同情・感情移入・一體感」、富成教授「文化の普及化」の諸論稿を寄せ、在學生泰國キムヘン・シユテイクル「今日の泰國」掲載。

○二千六百年記念事業の一つとして、圖書課では、商業經濟圖書の分類改正と記念文庫の創設を計畫す。

○從來のプロゼミナール制（十五名内外に學生を分割したる）に代え、德增渡邊越村三教授がクラス別に原書購讀解說を擔當することとなつた。

○井手文雄氏來任。猪間講師に代り財政學擔當。同氏は九州帝大卒業後、同大學助手として財政學研究室に居られた人である。

五月（第百八號）

○學生宮崎義一の「計畫經濟の限界」掲載。

○應援團結團式。團長加藤八郎。

六月（第百九號）

○第十四回對商工野球戰。三位一體總努力の凱歌、宿敵高工をストレートに擊碎す。第一回戰本校七A一四高工

第二回戰本校八―四高工。バッテリー　大門、戸來、小田野。過去二連敗のあと、この優勝は感激を昂め、校庭篝火燃える中で勝利の萬歳を絶叫す。

○七月東京に開催される日米學生會議に、本校より學生代表二名派遣決定。

七月（第百十號）

○滿洲國皇帝陛下御來訪。横濱御入港を迎ふ。

○水泳部　對高工定期戰四連覇成る。

柔道部　對高工定期戰に勝つ。

劍道部　五專門大會に制覇。

○深緑の三溪園待春軒にて俳句會を開く。寫眞部第一回校内展開催。

八月（第百十一號）

○渡邊敎授の「大領域經濟的生活圈の外郭部域と經濟協定の新形態」、沼田嘉穂敎授の「戰時經濟と統制の强化」の二論稿掲載。

○本年度第二次集團勤勞作業。

○西村敎授日本學術振興會の委囑を受け、謠曲五十卷英譯に着手す。

○野球部は寶專關東大會に、五Ａ對三で横專を敗り優勝、更に甲子園に於ける全國大會に關西學院を五Ａ對二、

横專と再び會ひ之を三對二で退け、決勝戰で西南學院を七Ａ對二で一蹴して堂々たる優勝振りを示した。

○水泳部は五專門大會に制覇、東部高商大會では名古屋高商六十二點に次ぎ五十點で第二位となる。神宮プールの全國高商大會では八百米リレーには優勝したが第四位であつた。

十月（第百十二號）

○全校を擧げて新體制に卽應、學友會積極的解消再編成されん。

○畏くも錦旗を迎へて特別觀艦式擧行さる。代表者參列奉送迎。午後授業休業、拜觀。

十一月（第百十三號）

○越村敎授の「ワーゲマン氏の財貨循環圖型批判」、學生論文「經濟哲學管見」（工藤雄治）、「高橋哲學について」（深谷迪）、「新經濟倫理」（山尾泰造）、「生活と宗敎」（田邊福松）掲載。

○十日紀元二千六百年奉祝の大式典擧げらる。本校に於ても西村敎授校長代理として式典擧行。十一日には授業を二時間で打切り、校庭に集合、校長の祝辭あつて後、伊勢山皇太神宮參拜行進。

○十一日の奉祝會に、時田敎授引率音樂部員五名奉祝歌齊唱團に參加、宮城前式場にて奉唱。

○敎育勅語渙發五十周年記念式擧行十月三十日。

○田尻校長光井敎授、敎育功勞者として十月三十日文部大臣より表彰され木杯一個授與さる。

○神宮大會高專野球に於て高知高校を二對〇にて破り、決勝戰にて山口高校を五對三で擊破して堂々優勝す。

○福田要助教授去り、井上憲司郎講師後任となる。福田氏は別科の農業を擔當され又寮監として寮生の生活指導に當られ、親しみ易い性格と非常な勤勉振りは學生に敬慕されてゐた。氏の榮養料理は有名である。

十二月（第百十四號）

○各務記念財團の篤志により、太平洋貿易研究所設立。二日創立委員會開催。
○學校報國團結成さる。各部長の所懐揭載。
○排球部　定期戰に高工を屠る。
○好成績の體力檢査、中級九十一名に上る。
○紀元二千六百年奉祝大音樂會盛況。
○同英語劇開催。

十六年

一月（第百十五號）

○學界展望欄設けられ、第一回に黒澤教授會計學界展望寄稿。
○學生懸賞論文（學報部主催、越村教授審査）一等入賞者宮崎義一の「經濟價値の論理構造」揭載。
○太平洋貿易研究所資料目錄作成、近く上梓の運びとならん。

○文部省の綜合視察は十二月十三、四日に亙り行はれた。

三月（第百十六號）

○太平洋貿易研究所開所式擧行。卒業生坂本四郎、辻籛二、佐治康治の三氏の現地報告を聽く。
○入學志願者減少。第二部に進學制限令影響し又試驗期日が高校と重なるためらしい。
○報國團生活部購買班班則成る。

四月（第百十七號）

○Y・K・K第九回懇話會は英國でスパイ扱ひを受けた楨原覺氏を招き講演を聽く。
○全國高商科目を改廢、教授要綱飛躍的發展。
○本年度プロゼミナールはクラス單位とし、岩本、森田、井手三教授分擔。セリグマンの原論講讀。

五月（第百十八號）

○學生の研究論文寄稿に紙面横溢。その一つ經濟生活構造の概觀（龍坂晴史）。
○應援團結團式。五月一日。團長脇長武夫。
○靖國神社臨時大祭に當り四月二十五日全校保土ケ谷忠魂碑參拜。
○支那語講師に菅谷正二氏を迎へる。

六月（第百十九號）

○第十五回對高工野球定期戰、燦たり二連覇の偉業。第一回戰本校一一―三高工。第二回戰本校五A―三高工。

バツテリー　戸來、常見、小田野。

○銃劍術班活躍、戸山學校における第一回段級試驗、吉田保三初段合格。

七月（第百二十號）

○高商標準教授要綱決定、日本商業精神を確立。三學年に分科制を採用。

○興亞勤勞報國隊員五名壯行會。

○國策に順應して愈〻教練強化實施。

○強歩大會、本校戸塚競馬場間折返し二十四粁強歩。第一着二時間二十九分。

○第一回研究班講演會、黒澤教授物價政策を說く。

○校醫松岡長一郎博士の「ツベルクリン反應について」の記事揭載。

○ラグビー、蹴球、籠球の三部對抗戰、大倉高商との間に行はれ、二年連敗の後を受け堂々雪辱成る。蹴球籠球に勝ちラグビーに敗る。

○新に結成された横濱五專門射撃聯盟の第一回大會に於て個人戰では一位、二位、三位、五位を占めたが團體戰では四位。

○水上競技班　商大專門部に三連勝、高工に五連覇、五專門大會では三位。

○陸上競技班　商大專門部との定期戰に大勝。

○馬術班　第一回馬事訓練大會に參加。

○籠球、蹴球、柔道各班は對高工定期戰に敗退。

八月（第百二十一號）

○現下の臨戰體制に即應、學校報國隊を編成。

○太平洋貿易研究所の研究叢書第一第二輯刊行。

○德增教授「兒島灣干拓農場を觀る」を寄す。

○獨ソ開戰と英米の對日資產凍結で歐米圖書殆ど杜絶。

○文部省「臣民の道」公刊頒布。

十月（第百二十二號）

○高專研究員として渡邊教授、日本精神文化研究所へ入所。十月十一日より十二月二十七日迄。

○黒澤教授蒸濶製糖業視察、八月より一ケ月間。

○沼田教授「原價計算要綱の確立とその社會的効果」、下田教授「東亞共榮圈の研究」、森田教授「統計の本當のウソ」、黒澤教授「製糖期と非製糖期」の諸寄稿がある。

○報國隊結成式擧行（九月六日）
○報國隊大隊長岩本敎授の「決然ペンを捨て軍國の御用に立て」の談戰る。
○待望の記念文庫一般公開迫る。
○陸軍の防空訓練を受けて歸校せる下津屋敎授の「民防空の先驅たれ」の談話揭載。

十一月（第百二十三號）

○大學高專等の在學修業年限短縮。明年は九月卒業、大學入學は十月。
○校外の學者からの寄稿揭載し始む。加茂儀一氏の「技術と經濟」、相川春喜氏の「日本技術の構成的性格」が富成敎授の「機械生產とその特質」とともに戰る。
○大學高專銃劍道大會に於て第二位獲得。
○體力章檢定大會、成績極めて良好。
○横濱學生庭球大會に妹尾渡部組優勝。
○就職、十月下旬に全部決定。十月一日から銓衡、一ト月足らずの快速調。
○大日本學徒體育振興會設立決定、學徒の體育組織一元化さる。

十二月（第百二十四號）

○大東亞戰爭勃發、對米英宣戰の大詔渙發。詔書奉讀式を九日校庭にて擧行。
○在學年限短縮に鑑み授業時間大幅增加。
○太平洋貿易研究所一大飛躍、南方政策研究に着手。
○佐分利大佐應召、後任正木大佐。
○射擊班は市內五專門大會に全種目優勝。
○學生生活の向上を圖り全校生に讀書調査。

十七年

一月（第百二十五號）

○賀陽宮殿下御台臨（十六年十二月二十四日）。優渥なる御訓示を賜ふ。
○戰時下學徒實踐要項五訓、文部省敎學局より通達さる。
○八日第一回大詔奉戴日。大詔奉讀式擧行。
○初の繰上卒業式擧行、十二月二十七日。
○勤勞協力令發せらる。

三月（第百二十六號）

○新學年度學科課程決定、產業經濟の變革に卽應。卒業繰上の對策全く成る。

○正木大佐に代り藤堂大佐來任。
○新嘉坡陷落(二月十五日)、十八日祝賀式擧行、五專門合同分列行進を縣廳前廣場に行ふ。
○第一師團管下高專射撃査閲に第二位を獲得。
四月(第百二十七號)
○卒業繰上に對處し就職對策決定。
○マレー語新設。
○濕崎敎授(英語擔當)。神子田助敎授(獨逸語擔當)來任。
○勤勞協力令下の海軍工廠へ出勤、三月二十二日より三十一日まで。
○東亞研究班新設さる。班長下田敎授。
○海洋班新設さる。班長下津屋敎授。
五月(第百二十八號)
○校長、敎育審議會の功績により賜杯の光榮に浴す。
○馬來語に信永講師來任。
○支那語菅谷講師辭任、岡本隆三助敎授來任。
○太平洋貿易研究會開設、Y・K・Kはこれに合流解消。施設を富兵會に開放。
第一回太貿研究會「華僑問題」牟田哲二氏講演。
○應援團結團式、八日。團長小瀬行則。
六月(第百二十九號)
○在學年限短縮に即し夏期鍛錬期間を短縮。
○渡邊敎授文部省奬學金を受く。
○五專門射撃大會團體個人共に優勝。
○第十六回對高工野球定期戰、三連覇成る。第一回戰本校五―三高工。第二回戰高工一〇―七本校。第三回戰本校一三―四高工。バッテリー戸來、小田野。
○庭球班　七年振に高工を撃破、リーグ第二位に躍進。
○籠球班　五專門リーグ戰に第二位獲得。
七月(第百三十號)
○南方の資源調査へ黑澤敎授出發。
○敎練査閲の閲兵分列は報國隊の編成で受閲することとなり岩本大隊長以下敎授中隊長は佩劍して指揮す。査閲官の講評は優良。
○圖書課の增田彌之助氏退官。在職十六年。

八月（第百三十一號）

○本年度就職全部決定。

○全國實專野球大會、横濱公園球場に開かる。決勝戰にて商工と熱闘延長十四回五對四にて惜敗。關東大會にも決勝戰で商工と對戰七對〇で敗退してゐる。

十月（第百三十二號）

○田尻校長勳一等に叙せらる。

○校長滿洲國建國十周年記念式典參列。

○本科第十七回卒業式九月十六日擧行。

○東京尚商會設立、官立高商卒業生の親睦を圖る。

○渡邊敎授現職のまま二ケ年間、佛印に新設の南方學院へ赴任決定。

○本校に貯蓄組合誕生。

○横濱驛に出動、國策輸送に協力。

○文化講演宇野圓空博士の「南方の民族文化について」。

○關東の雄横專を擊破ラグビー班努力結實。

十一月（第百三十三號）

○繰上卒業に臨時的措置、十二月中に試驗施行。

○農繁期に下る協力令、小机中山に勤勞奉仕。

○敎練擔任吉濱少尉去る。

○明治神宮國民錬成大會に縣代表として參加したる體操班、集團體操競技に第四位。

十二月（第百三十四號）

○森田敎授論稿「共榮圈の物價問題」掲載

○大東亞戰爭一周年、一週間に亙る行事實行。

○防火デーに防火訓練實施。

○校內銃劍道大會二年A組制覇。

○三專門銃劍道大會に優勝。

○吉村氏を迎へ文藝班短歌會を開く。

○五專門音樂會關東學院講堂に開催。

十八年

一月（第百三十五號）

○學力低下の防止を圖り且つ三分科制愈々實施。
○學制改革勅令公布、皇國民の錬成を主眼。實業專門學校は專門學校とす。
○二十年史の編纂決定。
○大東亞共榮圈特輯欄に、谷口吉彥氏の「共榮圈の貿易問題」、館稔氏の「大東亞建設と皇國人口政策」、黒澤敎授の「南方經濟の變革過程」、德增敎授の「亞細亞民族と滿洲」の諸論稿收載。
○嚴寒に鍛ふ。全校擧げて合同體操と、武道稽古、今冬は敎室の暖房廢止。
三月（第百三十六號）
○第十四回貿易別科卒業式、二月二十七日擧行。
○入學試驗旬日に迫る、競ふ一千五百餘名、開校以來の最高記錄。試驗問題を文部省で統一。
○防空實戰的訓練實施。
○三月末勤勞作業實施、陸軍兵器廠へ出動、報國林植林、綜合運動場作業、校內防空壕作業の四班に分る。

同窓會記

母校創立二十周年を迎へるとともに、同窓會も本年をもつて十有七年の歷史をもつに至つた。その間母校に育まれ、實業人として巢立つた同窓生は三千人に垂んとし、支部の所在は內地、北海道、朝鮮、臺灣を超えて滿洲支那および濠洲に延び、文字通り東亞の各地に力強い發展の網を繰り擴げるに至つた。既に年次の古い卒業生間には軍役支店長を續出し、大多數は大東亞戰下の經濟界に於ける中堅級として活躍し、校是「信頼の人」を信條として、各〻その職域に一意奉公の誠を捧げつゝある。

同窓會の歷史もこれを二つの段階に分けて考察することができる。第一は第一回卒業生の年より母校創立十周年に至る創成期であり、第二はその後より二十周年に至る發展期である。

一、創成期

昭和二年三月、第一回生卒業とともに同窓生の親睦機關として橫濱高商同窓會を設立することとなり、設立委員によつて會則の作成その他各般の準備工作が進められ、田尻校長を會長に戴き、第一回生中より市川泰次郎、

芳野一男、根本清君が幹事となり、評議員には右の外若原竹次、伊藤和吉、大關幸一郎、藤田勝義の諸君が選任され、會計主任に若原君が當り、本部事務所を母校に置いてここに横濱高商同窓會が生誕した。この年十一月二十二日横濱市内馬車道竹内牛肉店に於て第一回總會が開催され、會務報告と會則改正を審議し、同時に神奈川および東京兩支部が發會式を擧げた。この年には母校野球部、庭球部、籠球部等のために卒業生による後援會が結成された。

翌昭和三年五月二十六日第二回總會が開催された。この時第二回生の大西泰一、早瀬正彌、淺井秀次、若山茂坂本四郎の諸君も新役員に選任され、また會計事務は母校の齋藤照之助氏、庶務は矢島熙氏に囑託することとなり、新たに機關紙として同窓會報を發刊することとなつた。同年七月には河本英二君等の奔走によつて大阪支部が創立され、十一月三日の御大典には田尻校長を迎へて臨時總會が開かれた。この年には又運動各部の後援會と並んで學藝會方面にも後援會が結成され、講演部のために講究會が、謡曲のために鼎鳴會が生れた。

昭和四年には古館市太郎教授を評議員に推薦して陣容を固めるとともに、渡邊輝一教授の歸朝歡迎會、田尻校長の渡歐送別會を開き、また井上鎧三教授を中心に横濱生糸商勤務の會員間で生糸貿易研究會が結成され、母校と同窓生とのあひだに學理と實踐の交驩が行はれた。

兩來同を重ねるに從つて會員の數を增大し、昭和五年には神戸に、昭和八年には靜岡に、その他名古屋、朝鮮にそれぞれ支部が設立せられ、定期總會、クラス會等を通じて會員相互の親睦を厚くするとともに、同窓會誌および會報を發行し、あるひは商商學報に同窓會欄を設けて會務の狀態、會員の動靜を報知し、毎年會員名簿を作成配布して會員相互の連絡を密にし、母校學友會に補助金を與へ、また會計の基礎を確立して會務の遂行を圓滑化する等、次第に機構の整備と事業の充實を圖り、同窓生の親睦機關として堅實なる發展の一路を辿つてきた。

特に昭和九年母校創立十周年を迎へるとともに、同窓會の記念事業として各種の行事を催すこととなり、昭和八年一月より準備に着手し慰靈祭係委員として芳野一男、早瀬正彌、增田喜三郎、山上伸一、講演會係委員として伊藤和吉、吉川吉光、木村治郎、音樂會係委員として瀧本新、岡澤治彦等の諸君がこれに當り、實行機關として事務部を設け常任幹事、市川泰次郎、早瀬正彌、上瀧一郎、武藤正平、越村信三郎、喜多山九馬、間瀬俊平等の諸君および特別會員齋藤照之助、矢島熙の諸氏がその代表となり、各般の計畫と準備を進め、昭和九年十月十四日、母校講堂に於て死亡會員のために盛大なる慰靈祭を行ひ、同日午後五時より開港記念會館に於て同窓大會を開催した。この時一堂に會するもの、會長、母校特別會員、京濱在住會員、および地方支部代表を併せて四百を超え、頗る盛會であつた。

本部の十周年記念大會に呼應して各地支部に於てもそれぞれ各種の催しが行はれた。特に神戸支部に於ては母校より下田禮佐教授を講師として招聘し、「中南米經濟事情に就いて」といふ演題の下に、神戸商工會議所講堂を會場として、盛大なる記念講演會を開催した。

更に母校十周年記念事業の一つとして、學校に水泳プール建設の議が起り、豫算七千圓中、三千五百圓を同窓

會より寄附することとに決定し、また同窓會館設立基金一萬五千圓を五ケ年計劃で募集することとなり、齋藤氏の豫算案を中心に昭和九年始めより八回に亙つて委員間に協議が進められ、實行委員大西泰一、武藤正平の兩君が八月から十月にかけて各地へ寄附金募集の爲に出張し、豫定の金額の調達および豫約取決めのために奔走した

二、發展期

翌昭和十年三月十日、横濱市内千登世に於て幹事會および評議員會を開催し、會則改正に就て審議した結果、總務、監事、顧問を新たに設けることとなり、引續き新入會員歡迎會が開かれた。當夜の出席者は、母校教職員新會員および先輩を加へ約百八十名に及び園遊會式の饗宴と餘興によつて空前の盛況を呈した。

同年七月十一日靜岡及清水地方の大震災に罹災せる會員に對して見舞を發し、翌十一年四月母校教授古館市太郎氏大倉商商校長に榮轉さるるや、引續き同氏を本會顧問に推薦することとし、母校訣別式に於て本會より記念品を贈呈するとともに、五月七日京濱在住會員は東京銀座中央亭に於て盛大なる祝賀會を催した。

昭和十一年四月以來、母校入學生より同窓會終身會費積立金を徵收することとなり、また同年五月以降、特別會員齋藤照之助、矢島熙の兩氏を同窓會主事に推し、會報、名簿の編輯、出版、および會計事務を委囑することとなり、茲に同窓會の財政と事務の體系が確立せられた。

本年をもつて同窓會も創立以來十周年を迎へたので、本部では會報の十周年記念號を編輯することとなり、また大阪、神戸の兩支部では、田尻校長の西下を機とし、十月三日十周年記念關西大會を開催した。會場は寶塚の水明館、相會する者、大阪支部長河本英二君、神戸支部長若原竹次君以下六十九名、六甲の翠巒を仰ぎ、武庫の清流を臨んで同窓會の發展を祝し、各種の餘興に一夕の歡を盡した。

同年十月廿四日サクラヤマグリルに於て懸案の第一回全國支部代表者會議が開催され、東京支部より西野己男司、菊地英夫、靜岡支部より井田仁、岩間雪夫、伊東銈一、東海支部より伊藤和吉、大濱敬次、大阪支部より河本英二、龜井竹次郎、神戸支部より若原竹次、中山二郎、朝鮮支部より清水泉の諸君來會し、本部總務市川泰次郎君議長となつて、プール建設、終身會費等の議案を審議し、次いで一同千登世に於ける田尻校長の招宴に列し、和氣靄々裡に本支部の最初の交驩が行はれた。

昭和十二年二月五日母校助教授田尻彥幸氏逝去さるるや、遺兒養育資金を募集することに決し、發起人および實行委員を擧げて會員より寄附金を募集し、七百餘圓を遺族に贈呈した。

同年五月三十日母校に於てプール開き興行せられ、工事報告、校長挨拶の後、日大選手等の武法が行はれた。引續き同日午後二時より母校會議室に於て臨時總會を開催し、會則改正の件を審議決定した。その結果、本部總務は常任總務に、任期三年は二年に改められ、また幹事は廢止され、現行規則の基礎案が成立した。會則改正の結果、九月一日、最初の常任總務として西野己男司、深澤多喜男、武藤正平、越村信三郎、喜多山九馬の諸君が選任され、次いで廿二日監事として市川泰次郎、大西泰一、近藤一男、勝木德治郎の諸君が發令され、母校

側監事として岩本啓治、德增榮太郎兩敎授が重任されることとなつた。

既にこの年七月七日、日支事變勃發し、同窓會員より多數の應召者を送るにいたつた。よつて九月廿一日第一回常任總務會を次いで九月廿八日クラス總務會を開催し、更に十月廿四日第二回全國代表者會議に諮つて、應召會員に慰問袋を送り、戰歿者遺族に校長題字の掛軸及香典を贈り、戰傷者に對し見舞狀を發送することとなつた

既に第一回の全國代表者會議の頃より同窓會名について各種の案が出たのであるが、結局會長に一任することとなり、本會議に於て田尻校長の命名により、爾後本會を「富岳會」と稱することになつた。

昭和十三年四月には母校敎授、富岳會評議員會顧問岡野鑑記氏滿洲建國大學敎授榮轉の爲送別會を催した。翌十四年三月四日橫濱銀行集合所に於て定期總會を開き、議案審議の後來濱中の岡野鑑記氏より「滿洲に於ける五族協和の意義」と題する講話を聽いた。五月十一日常任總務市川泰次郎君シドニー赴任の爲後任者として芳野一男君が選任された。また六月十日母校森田優三敎授歐洲歸朝歡迎會をサクラヤマグリルに於て開催した。

既に日支事變も可成り進展したので、本事變を記念すべき特別事業計畫を企てることとなり、十四年九月より日支事變記念事業委員會が結成され、常任總務、クラス總務、地方總務および監事中より實行委員を選出して各般の準備を進め、昭和十五年一月二十一日母校講堂に於て會員中の支那事變戰歿者の慰靈祭を執行した。式は先づ始祭の詞、國歌吹奏、修祓降神獻饌に始まり、神官祭詞、祭文朗讀、玉串奉奠終つて、富岳會代表、遺族代表挨拶を述べ、校歌合唱によつて式を閉ぢ、別室に於て招待遺家族を中心に英靈の在校時代の追憶談を交し、嚴肅なる祭典を終了した。

同年六月十一日若原竹次君等の發起により橫濱支部が創立せられ、また九月一日市川泰次郎君、布施眞剛君等が中心となつて濱洲支部が、さらに十二月廿三日中村義男君等の努力によつて新潟支部が設立され、翌十六年三月四日伊藤正一君等の奔走によつて九州支部が生誕した。

三月八日橫濱市內紅葉閣に於て評議員會および定期總會が開かれ、各種の議案を審議決定し、懇親會席上に於て天野恒雄君の聯銀券、軍票對法幣の關係についての現地視察談を聽いた。

昭和十五年は皇紀二千六百年に當り、母校に於て記念學生文庫を創立することに決し、資金の一部を同窓會の寄附に俟ちたき旨依頼があつたので、十六年二月のクラス總務會および三月の總會に諮り、各支部の承認と援助を得て、寄附金募集に着手し、三千六百餘圓を同文庫に贈つた。

尙昭和八年岡野鑑記敎授の主唱によつて母校敎授有志、橫濱財界有志、京濱在住同窓會員のあひだに橫濱經濟研究會が組織され、屢々講演會、座談會を開いて學理と實務の連絡を圖つてきたのであるが、昭和十三年岡野敎授渡滿後德增敎授が、この會を主宰し、また母校に太平洋貿易研究所が設置されるとともに、本會も太平洋貿易研究會に發展的解消を遂げ、さらに昭和十七年以降會員の母體を同窓生有志に置くこととなり、橫濱銀行集會所に於て隔月講演會座談會を開き、同窓生間の南方經濟圈に對する認識を深める上に大なる貢獻を與へた。

尙昭和十六年には統制經濟の進展に伴ふ學理と實務の統合を圖るため、芳野一男君等が中心となつて經理研究

會を組織し母校敎授黑瀧清氏を講師として東京丸ノ内精業會館および横濱銀行集合所等に於て數回に亘り有志間に眞摯な研究が續けられた。

その間、大阪、神戸、九州その他各地支部も次第に會員を增し、總會、クラス會等の開催も頻繁に行はれた。特に東京に於て全國官立高商卒業生の親睦協調機關として東京高商會が組織され、共同の會館設置の議が起るとともに富丘會東京支部は率先これに參加することに決し、支部長松井郁一君等はその創立企劃に參與した。また十二月十三日栗原義潤君等を中心として天津支部が創立され、北京支部、滿洲支部と並んで富丘會は大陸に確乎たる地盤を据えることとなつた。

昭和十七年度を迎へるとともに、富丘會員の增大と物價高に伴ふ經費膨脹に對處する爲會費增額の件が日程により、三月二十二日橫濱開港記念會館に於て開催された定期總會に於て原案が可決され、富丘會の財政的基礎が確立した。終つて二階大食堂に於て晩餐會に移り、田口利介君の「太平洋海上決戰」に關する講演があり、和氣藹々裡に解散した。

既に前年十二月八日大東亞戰爭開始とともに會員中より軍務あるひは社務のために南方に應召あるひは轉任する者相次ぐ情況であつた。常任總務芳野一男君も重用任務を帶びて南方に轉任することになつたので、若原竹次君が後任者となり、篠頭總務として富丘會の爲に盡力することとなつた。

昭和十八年五月母校創立二十周年記念式擧行に當り、富丘會に於てもこれに對應し、各種の記念事業を行ふこととなり、慰靈祭、同窓大會、母校職員勤續者表彰、母校記念事業への寄附等が計劃され、目下準備より實行に移されんとしつつある。

富丘會規則

第一條　本會ハ富丘會ト稱シ本部ヲ橫濱高等商業學校内ニ置ク

第二條　本會ハ會員相互ノ友誼ヲ厚クシ知識ヲ交換シテ我國實業ノ振興ヲ計ルヲ以テ目的トス

第三條　本會ハ左ノ會員ヲ以テ組織ス

一　正會員　橫濱高等商業學校ノ卒業生及ヒ曾テ同校ニ在學セシ者ニシテ總會ノ承認ヲ經タル者

一　特別會員　橫濱高等商業學校ノ職員及ヒ曾テ同校ノ職員タリシ者

第四條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名、總務若干名、評議員若干名監事六名、會長ニハ橫濱高等商業學校長ヲ推戴ス

總務ハ常任總務八名以内、クラス總務及地方支部代表總務若干名トス

クラス總務ハ各クラス毎ニ評議員ノ互選ニ基キ會長之レヲ選任ス

クラス總務ハクラス總務會ヲ組織ス

常任總務ハ會員中ヨリクラス總務會ノ推薦ニ基キ會長之レヲ選任ス

常任總務ハ常任總務會ヲ組織ス

地方支部代表總務ハ地方支部ノ推薦ニ基キ會長之レヲ選任ス

評議員ハ各卒業期毎ニ五名ヅヽトシ毎年總會ニ於テ當該クラス所屬正會員ノ互選ニ基キ會長之レヲ選任ス

評議員ハ評議員會ヲ組織ス

監事ハ會員中ヨリ會長之レヲ選任ス

クラス總務、常任總務及監事ハ互ニ之レヲ兼任スルコトヲ得ス

役員ノ任期ハ總テ一ケ年トス

但再選スルコトヲ妨ケス、補缺トシテ就任シタル役員ノ任期ハ前任者ノ殘期間トス

第五條　會長ハ本會ヲ總理ス

クラス總務會ハ本會主要會務ノ審議決定ヲナス　常任

要ナリト認メタルトキハ臨時評議員會ヲ開クコトヲ得

第九條　正會員ハ入會ノ際入會金參圓及會費トシテ金參拾錢ヲ納付スヘシ

但特別規定ニ依リ終身會費ヲ納付シタルモノハ別ニ基本金トシテ金拾圓ヲ納付スルモノトス

第十條　既ニ納付シタル會費ハ何等ノ事由アルモ之ヲ返還セス

第十一條　基本金ハ總會ノ決議ヲ經且ツ會長ノ許可ヲ得サル限リ之ヲ支出スルコトヲ得ス

第十二條　本會ノ經費ハ豫算ノ範圍内ニ於テノミ支出スルコトヲ得

但シ止ムヲ得サル事情アルトキハ評議員會ノ承認ヲ經且ツ會長ノ許可ヲ得テ豫算外ノ支出ヲ爲スコトヲ得

第十三條　豫算案ハ總務部ニテ之ヲ作成シ評議員會ノ承認ヲ經ルコトヲ要ス

但會計年度ハ曆年ニ依ル

第十四條　豫算及決算ハ本會々誌ニ發表スルコトヲ要ス

第十五條　本會ハ每年一回會誌及年若干回會報ヲ發行シテ會員ニ配布ス

本會ハ每月橫濱高等商業學校構内ニ於テ發行スル「高商學報」ニ會報欄ヲ設ケ會報ニ代フルコトヲ得

總務ハ常例ノ會務ヲ處理シ且クラス總務會ニ提出スヘキ重要會務ノ立案計畫竝クラス總務會ニ於テ議決シタル會務ノ執行ヲ司ル

本會重要會務ニシテ臨時緊急ヲ要スルモノアル時ハ常任總務會ノ決議ニ依リ之レヲ執行スルニ至ルヲ得

但次ノクラス總務會ニ報告シ其ノ承認ヲ求ムルモノトス

評議員會ハ重要ナル會務ノ審議ニ參與ス

監事ハ會計ノ監査ヲ行フ

第六條　本會ニ左ノ職員ヲ置クコトアルヘシ

主事及書記若干名

第六條ノ二　本會ニ顧問ヲ置クコトヲ得

第七條　總會ハ每年一回三月之ヲ開キ會務ノ報告、役員ノ選擧、豫算、其ノ他重要ナル事項ノ審議ヲ爲ス

但シ必要アルトキハ臨時之ヲ開催スルコトアルヘシ

總會ノ決議ハ出席會員ノ半數以上ノ同意アルコトヲ要ス

第八條　評議員會ハ總會開催前總務部ヨリ議案ノ回付ヲ受ケ、ソノ審議ノ爲メニ評議員會議長之ヲ召集開催スヘキモノトス

但シ評議員會議長ハ評議員二名以上ノ要求アリ且ツ必

第十六條　正會員五名以上居住スル地ニハ本部ノ承認ヲ得テ支部ヲ設置スルコトヲ得

支部規則ノ制定及其改正ハ本部ノ承認ヲ得ルコトヲ要ス

支部ハ選任シタル代表總務ヲ經テ本部ト連絡ヲ保ツヲ要ス

第十七條　本會規則ノ改正ハ總會ノ決議ヲ經ルコトヲ要ス

昭和十七年度役員

會長　田尻常雄

顧問　古館市太郎　岡野鑑記

監事　德增榮太郎　小幡孫二

評議員會　顧問

岩本啓治　下田禮佐　不二門龍覩

南種康博　河村寬治郎

常任總務

若原竹次　服部苗四郎　武藤正平

越村信三郎　大類武雄

クラス總務

一回　辻　籟二　二回　若山　茂

三回　布施　重剛　四回　白井　司郎

五回　森　有三　六回　糸井　泰治

七回　原　幸男　八回　林　孝一

九回　小林　敏道　十回　盛瀬　文一

十一回　粟野原甚之　十二回　三谷　武

十三回　花井　孝雄　十四回　越智　平吉

十五回　和田　利雄　十六回　雨谷　精一

十七回　山本　晉平

地方總務

松井郁一（東京支部代表）

藤田勝衛（橫濱支部代表）

河本英二（大阪支部代表）

中島隼人（神戸支部代表）

井田　仁（彌岡支部代表）

伊藤和吉（東海支部代表）

大平主馬之助（關西支部代表）

中村襲勇（新潟支部代表）

塚田義雄（九州支部代表）

大內　基（北海道支部代表）

森田榮作（朝鮮支部代表）
大石建城（滿洲支部代表）
龍山奇平（滿洲支部代表）
栗原義潤（天津支部代表）
村田嘉幸（北京支部代表）

評議員

一回　矢田四郎　板倉光雄　橋崎紀男
辻額二　渡部泰治　千葉信治郎
二回　若山茂　堀崎輝夫
吉川吉光　小泉武夫
三回　布施重剛　加田熙實　加藤芳雄
木村治郎　菊池英夫
四回　白井司郎　林淳一　川邊克己
鈴木秀　高木一
五回　森有三　野川和夫　大平一雄
内山秀雄　磯谷禎三
六回　糸井泰治　天野恒雄　星野泰助
齋藤聰　城石正毅
七回　原幸男　西尾邦明　岡本銑一郎
鈴木善爾　田中良雄
八回　林幸一　伊藤格爾　酒井榮三
別六回　佐塚龍雄
別八回　阪梨滋
別十回　湯田孫平
別十二回　田邊俊雄
別五回　畠貞藏
別七回　尾澤豐英
別九回　堀江四郎
別十一回　天野哲夫
別十三回　城市富士郎

監事

平館利雄　瀧本新　木川敏一
喜多山九馬

支部所在地竝役員

東京支部

東京市麹町區丸ノ内鐵鋼會館内日本綫材製品統制株式會社内　松井郁一氣付

支部長　松井郁一
常任幹事　小池與市

横濱支部

横濱市中區山下町四六太平洋貿易株式會社内　藤田勝義氣付

支部長　藤田勝義

大場鑫治　丹原正一
九回　小林敬道　鈴木婁雄
矢島續　本多啓次郎
八木橋親臣
十回　廣瀬文一　佐藤良四郎
佐川正次　河島平助
十一回　栗野原基之　麻生武　河部建夫
内藤威　今井新一郎
十二回　三谷武　池田進
手塚泰輔　岩崎礎太郎
十三回　花井幸雄　澁木啓一
舟津鐵也　山崎秀男
十四回　越智平吉　海老根源一
和泉澤彌太郎　栗山義
十五回　和田利男　浦田金吾
赤羽根龍　井上富次郎
十六回　松本宗信　若林昌也
雨谷精一　石川勝三
長洲一二　藤沼歟一
十七回　山本晉平　津田幸太郎
有賀奐夫　酒井借輔
四王天正寧　上川内祥六
別一回　平沼金一郎　別二回　橘本迪
別三回　廊近正人　別四回　岩崎和吉

常任幹事　岸田俊介　瀧本新
林淳一　大類武雄
池田勇　栗田義

大阪支部

大阪市西區西滑水町三和銀行心齋橋支店

支部長　河本英二
常任幹事　石井滑　鄉幸之助
石井知

神戸支部

神戸市神戸區港岸通三非物産株式會社雜貨部中島隼人氣付

支部長　中島隼人
常任幹事　古賀勝正　鈴木健太郎

朝鮮支部

京城府南大門二丁目
麒麟麥酒株式會社京城支店内

支部長　森田榮作
副支部長　鈴木五郎

蘇滬支部

支部長　大石建城

滿洲支部　大連市桂町二〇　福山方
支部長　福山奇平
天津支部　天津特三區九經路三一二號　栗原洋行氣付
支部長　栗原義潤
幹事　田波久五郎　中山博
北京支部　北京特別市中二區新平路二七號村田嘉幸氣付
支部長　村田嘉幸
常任幹事　佐伯健一

戰歿者氏名

本科	一回	石田光治	本科　三回　飯島政一
〃	六回	眞野幸次郎	〃　六回　宮川保
〃	六回	佐藤祐幸	〃　八回　早福由五郎
〃	九回	望月智	〃　九回　佐藤大
〃	九回	上島文男	〃　十回　關根清
〃	十一回	石川榮一	〃　十一回　今井千藏
〃	十一回	高田喜德	〃　十二回　前號
〃	十二回	吉光市郎	
本科	七回	三宅恂	本科　七回　阿部一二三
〃	八回	唯野眞一	〃　九回　磯谷信義
〃	十回	坂本喜美男	〃　十一回　岩田俊郎
〃	十一回	近藤正雄	〃　十二回　北代幸彥
〃	十二回	齋藤政夫	〃　十二回　坪田信
〃	十二回	保谷秀雄	〃　十三回　關口倫正
〃	十四回	小林祐輔	〃　十五回　相澤芳郎
貿別	五回	横田清	貿別　八回　池田耕三
〃	八回	内藤良一	
本科	七回	奥野茂	昭和十七、五、東支那海ニ歿ス
〃	九回	柳田喜七郎	同
〃	十回	坂田寛	同

回想錄

煙洲鈴木達治
（元横濱高等工業學校長）

横濱高等商業學校の創立開校せられたることは、大正十二年九月一日の大震災の爲め全滅した我横濱市の復興に大なる聲援を與へ且つ貢獻したるものと信ず。

高商は大正十三年に開校の豫定であつたが、大震の災害は實に深刻にして餘燼容易に收らず、從つて高商新校舍の建築工事の進行捗らず、到底新校舍に於て始業の運に至らざる爲め、臨機の對策として横濱高等工業學校の校舍に於て店開きをすることとなつた。横濱高工は大震災の爲め全校舍は烏有に歸し、翌十三年三月にはバラックではあるが新校舍が建築せられた。舊校舍に比し建坪は多少の增加があつたので、高商の開校一年生を迎へる充分の餘裕があつた。

◇……◇

かくして高商は兎に角高工の新バラック校舍内で呱々の聲を上げたのであつた。

長崎高商の校長として令名あつた、田尻常雄氏が新校長として創立の任に當られた。當時私は高工の校長であつたが、軀幹巨大な田尻校長と短軀肥大な私と好き對照として、門のない高工の門を一ケ年間仲善く出入りした田尻校長は熊本市の出身で、少年時代には同市の熊本英學校に學んだ。私の教員生活の最初は此の英學校であつたが、今一、二年私が早ければ、同校にて田尻少年を教へた筈である、僅かの違ひで此尊嚴兒を私の門下に加へ得なかつたことは實に殘念至極である。

◇……◇

世事忽忙歳月は流れて高商は本年は創立二十年の記念日を迎へるに至つた。創立當時を回顧する一文を徵せられたが、往事恍として夢の如く、頽齡總てを忘れて茫然たるものがある。只一つ忘れ得ないものが、しかも其れは高工の校庭に殘つて居る。當時高工には職員食堂はなく、高商は勿論何一つ造營物がなかつた。高商は物置場位は必要であるとて、それを作つた。事實は食堂として設計したもので、高工では今日でも食堂として使用して居るのみならず、各種の小集會に學生まで使用して重寶がられて居る。高工の方では一ケ年間の格安家賃と考へて居るかも知れないが、兎に角立派な高工への置土産であり、又記念物である。

◇……◇

その内に高商の新校舍は堂々たる城郭の様に清水丘上に落成した。一日兩校教職員の別れの宴會が置土産の食堂で賑しく、且つ實になごやかに開催せられた。高商と高工とは、横濱に於ける直轄學校であるから、今後とも一層仲善くしよう、又一年に一回位は、兩校の教職員は會合して親睦を重ねようとお互に挨拶を交したものであつた。

併し其時、別れたきりで、申合した會合が一回も催すことなく、二十年と云ふ長い歳月が流れ去つた。只兩校を結ぶ唯一の大綱がある。それは毎年夏期に於ける野球の定期戰であつて今に繼續せられて居る。

定期戰は兩校學生の血を湧かし、校風の發揚に預つて力あつた事は、疑ふ餘地がないが、兩校の親善に資する處があつたや、否やは、疑問として殘される。私としては兩校として我横濱市の爲め、何等か其所に出色のある兩校の友好關係の存立が望ましく感ぜられる。

◇……◇

二十年間に高商は長足の進歩發達をした。全く田尻校長の精勵努力の致す所と、敬意を表せざるを得ない。

高商が第一回卒業生を出した頃は、一般世間の不景氣は、想像の及ばぬ所で、今日と較べると、文字通り隔世の感がある。追從する出身者の就職難は其後十ケ年も繼續した。

田尻校長は東奔西走、所謂席暖まる暇もなかつたであらう。各實業專門學校は、卒業生の就職難に惱み抜く最中に、横濱高商は其苦を知らなかつたかも知れない。所謂、就職戰場に於ては、必勝不敗の地位を確立したものであらう。全く田尻校長の精勵努力と其手腕に負ふ所であつて、出身者でない私共も、大に敬意を表する所である。

二十年の歳月は決して短かくはない。些少の頓挫の跡を留めず、一路向上躍進を辿つた二十年の經營は容易の事ではない。其れが又直轄學校であり、一人の校長に依つて成就せられた事蹟なるに於ては、一層其感を深くせざるを得ない。類例稀れなる偉觀である。

茲に創立二十年を記念するに當り惡文を草し田尻校長、敎職員其他高商關係の各位に謹んで深甚の祝意を表します。

横濱高商創立二十周年の回顧

古館市太郎
（大倉高等商業學校長、元本校敎授）

横濱高商の創立を回顧するとき、余は大正十二年九月一日の關東大震火災の聯想を禁ずることが出來ない。是れ高商の開校は、此大災厄の直後僅かに半年を經過して災害の中心たる東京横濱は、茫々たる一面の燒野原と化したる廢墟の跡に貧弱なるバラック式建築が點綴せられ、漸く復興の緒に就いた許りの時であつて、而かも罹災校の一たる横濱高工のバラック校舎の一隅に居候の姿に於て呱々の聲を揚げたからである。從て高商の生立ちは誠に恵まれざる諸條件の下にスタートを切つたのであるが、併し一面に於ては、此大震火災打擊の反動として我々大和民族の特長たる反撥的大勇猛心が奮起せられ、復興の氣運は大東京大横濱の建設に向つて勃然として盛り上つた擧國氣の中に、高商も田尻校長を中心として敎職員一同協心戮力能く其不利不便を克服して力強き地歩を進めたのは、今更ながら感慨無量に堪えない。斯くして翌年三月富士見ケ丘の新築未完成の本館一階及附屬木造建物を敎室事務室に利用して此處に引越したのであるが、設備の不完全は却て敎授生徒間の行動交流を親密ならめ、所謂家族的和親協同の空氣を醸成し、明朗快活なる進取の氣分に滿ちて第二年目を迎り、翌大正十四年春堂々たる現白亜殿堂校舎の落成と元氣潑剌たる敎授團の陳容整備と相俟つて校運の基礎茲に確立し、超えて昭和二年第一回卒業生を社會に送出した頃は本館屋上より横濱市復興進捗の狀況を眼下に眺めながら、我こそ復興の前驅たらんが如き意氣が全校に漲つたのであつた。爾來校運隆々今日に及べるは周知の如くであるが、此發展二十年史の一端を今少しく具體的に語らんとせば勢い田尻校長の存在を切離して考ふることが出來ない。

先づ第一に横濱高商校舎の建設は、其前後に設立されたる直轄諸學校と同樣、文部省の豫算は木造二階建の設計であつた。然るに田尻校長は任命と同時に關東大震火災の體驗を契機として其設計を耐震火災の鐵筋コンクリート建に變更すべき必要を主張し、例の熱誠なる押しを以て遂に當局を動かしてかの類例を破りたる宏壯なる校舎並に先例なき體育館商品陳列館等の設備を完成したのである。

次に學園敎養の根源たる敎授團の完璧であるが、之も田尻校長は優秀なる將來性に富める少壯有爲の人材招聘に腐心し、能く其人選を誤らなかつたのみならず、專任敎授の他校兼務を絶對に排除し、學園の敎養に專念集中

すべき主義を勵行したことである。斯くの如きことは何人も希望する所であるが、大都會の地に於て優秀なる敎授を得ることゝ併行して、而かも一糸亂れざる統制の下に之が實行を貫徹するは容易ならぬことであつて、單なる約束や權威的抑制のみにては出來難きものである。此點に於て田尻校長の緩嚴宜しきを得たる手腕並に同情に富める德性と相俟つて其苦心は全く他の追從を許さざるものあるを見逃がすことが出來ない。

第三に卒業生の世話に關する努力であるが、之れは橫濱高商の卒業生は如何なる不景氣の際にも就職難はないといふ世評と、就職先の重役連が田尻校長の熱誠と其心臟の强き押しとに對しては遂に根負けして一人でも卒業生の採用を餘儀なくされるといふ述懷を聞くことに依つて裏書されるのである。而して之れは校長としては、良き卒業生を採用して貰ふのは結局先方の爲めになるので、決して無理を强ゆる罪惡とはならぬといふ校長の信念と、其採用後の責任を飽まで回避せぬといふ態度より迸る誠意の現れに外ならぬ。卽ち校長が彼の精力絕倫なる鋭氣を以て東奔西走勞を厭はざる努力と、常に同窓會本部は勿論地方支部に至るまでマメに出張し、卒業生と接觸連絡を保つて之を督勵するのみならず、就職先を歷訪して其勤勞を視察し、絕えず指導警告を怠らざる精進振りは是又天下一品といふて差支なかろう。

右の如き校長の活動と其下に統率せらるる敎職員の努力とが相俟つて學校の隆盛と隆昌を齎らしたので、當に同校發展の二十年史を飾る特筆すべき偉觀と信ずる。

以上筆者が創立當時より昭和十一年迄同校に關係したる立場より親たる感想の一端を錄し、今後一層の隆昌發展を祈り創立二十周年の慶祝の辭に替へる次第である。

富士見ケ丘の追想

岡野鑑記
（建國大學敎授、元本校敎授）

もうすでに、二十年も經過したのか、——

建學二十年史の編纂に當つて、何か回想錄を書けとの依頼狀を受取つたとき、私は、今更の如く自分の過去を振り返つた。成るほど私が、歐米留學から歸つて橫濱高商に赴任したのは、創立後三年目の大正十五年の九月であつた。そして關東軍經濟顧問兼建國大學敎授要員として橫濱を去つたのが昭和十三年の四月だから、私は三十一歳の夏から四十三歳の春まで、壯年期の十二年間を、あの富士見ケ丘の學園で暮したわけである。その後滿洲に赴任してから早くも滿五年、私の敎壇生活が既に十七年を經過したことを想へば、二十周年の祝典と二十年史の編纂も、あゝ成るほどと頷かれる。

今こうして回想の筆を執つてみると、每年繰返された學校の一年間の行事が、走馬燈のやうに、追憶の胸に浮び上つて來るのを覺ゆる。

慌しい入學試驗の仕事が濟んで、ほつと一息すると、四月八日の入學式である。希望に燃えた新入生とその父

兄たちを前にして、定まり文句ではあつたが、温顔に微笑を湛えながら、嬉しさうに訓示された田尻校長の姿が眼に浮ぶ。

入學試驗の辛勞を乘ねた四月下旬の教職員懇談會も、最も忘れがたいもの〻一つである。時局柄昨今は中止されてゐるであらうが、あれほど心から打ち解けた仲間同志の旅行は、今後一生を通じて、恐らく他の社會では經驗することは出來まいと思ふ。横濱から長驅して鬼怒川と日光へのドライヴと、銚子から香取鹿島への旅行が、懇談會の壓卷であつた。

野球定期戰の感激は、年中行事のクライマツクスであつた。全校の教職員生徒が一塊となつて、共に狂喜亂舞し、悲憤慟哭するあの感激は、追想するだに血潮が燃え上るやうな熱い思ひ出である。

秋の行事もまた追想が盡きない。次々に開催される各種のスポーツの對校試合、全校を擧げての運動會、體育大會、野外演習、音樂會等どを經て、外語劇大會に至るまでの一連の行事は、それを一々回想するだけでも容易ではない。運動會での教職員たちのだるま突きの異樣なる光景は、まだ昨日のことのやうに眼前に浮ぶ。外語劇での生徒たちの器用な仕種が、まだあり〳〵と追想される。雄大なる富嶽を前にして野外演習の數日は、若々しい明朗な記憶となつて殘つてゐる。

ゼミナールの茶園氣もまた忘れ難いもの〻一である。一週一回のゼミナールは、時間的には不充分であつたが卓を圍んで十四、五人が親しく向ひ合ふと、私の全身には、期せずして清新の氣が滿ち溢れて來るのを覺えた。

教室でのやうなバラ〳〵の氣分ではなくして、お互の心と心とに血が通つて來るのを感じた。私は夕闇迫るのも忘れて時局を論じ理想を說いたものである。

しかし私の追想として特殊の意義を持つものは、やはり生徒主事としての五年間の經驗であつた。初代の内山主事の後を承けて、私がこの重責に就いたのは昭和八年であつた。その頃すでに左翼運動の峠は越えてゐたが、その餘燼はなほ到るところに燻つてゐた。下田教授と共に、私はいくつかの事件を處理したが、徒らな彈壓や刑罰よりも、生徒たちの環境を充分に理解した上で、温い親心をもつて諄々として說得することが、その最上の解決方法であることを經驗した。

野球定期戰の後始末もまた、その頃の生徒主事の苦勞の種の一つであつた。高商精神を昂揚させる絶好のチヤンスとして私はむしろ之を積極的に支持したが、勝利の夜の伊勢佐木町には少なからず惱まされた。敗戰の夕べの富士見ケ丘の悲痛なる光景もまた、耐えがたきもの〻一つであつた。だが、定期戰後の喜怒哀樂の感情はむしろ私にとつてはいとも愉快な苦勞の印象となつて殘つてゐる。

とまれ、二十年と言へば一昔である。大震災後の丘の上に、スフインクスの如く立ち現れた高商は、今や二十歳の青年として、大東亞戰爭の眞唯中に颯爽として立つてゐる。舞臺は幾轉回して、世紀の事業たる大東亞建設の重責の一翼が、今やこの二十歳の青年の雙肩に懸けられてゐるのである。すでに世に送り出した二千名を越ゆる卒業生とともに、今後の卒業生に課せられた任務は大きい。從來のやうな自由主義的個人主義的な、徒らな立

身出世の榮夢を一掃して、眞に應能奉公の誠意を以つて、大東亞建設の聖業に挺身されんことを祈つて止まないものである。

二十年の「山」の生活

德增榮太郎（敎授）

（私は回想錄を書かない者であつた。二十年史を執筆すれば自然にそこに二十年の回想が書かれると想つたからである。ところがそれを書き上げてみると矢張り「回想」の一斷片でも書いておきたいといふ氣持が出て來た。それは二十年史には自分の主觀を出來るだけ排除ないで資料を客觀的に取扱はうとした（それがどれほど成功したかは疑はしいとしても）から、夢ひ、自分の回想の一片を書きたくなつたのである）

歐洲留學から歸つたのは大正十三年六月二十五日であつた。大正十一年二月日本を離れ、四、五年は歸らない積りでゐたのだが、大震火災で橫濱が殆んど全滅し、自分の家も影も形もなくなつてしまつたことと、橫濱高商が一年早く開校したので文部省から至急歸朝せよとの電報を受取つたことで豫定を早めて歸つて來た。高工の假校舍で授業を始めたばかりの本校は、それでもあと二週間ばかりで夏休みといふところだつたから取敢ず文部省へ歸朝報告を出して假普請の、我家へ引籠つてしまつた。夏休みが明けて九月六日の始業式に一年生だつた一回生を前に就任挨拶をした。之が本校に於ける就任挨拶の皮切りであつたらう。その挨拶の要旨は、南太田の丘上に立派な容れもの——學舍が出來かけてゐる。いづれ還からずそこに移つて暢び暢びと勉强することにならうが生きた人間として勉强したいものだ。者おきたらしめよ、物おきたらしめるな、お互に。といつたやうなものだつたと記憶する。敎育にずぶの素人たる私は或は型に嵌まつた敎育は出來なからうがそこに却て新鮮味があるのではなからうかといふ多少の自負と抱負とが、生きた敎育をしたいといふ切なる希望となつたものだつた。爾來二十年、この抱負は果して實現されただらうか。自分の仕事は生きてゐたらうかと反省してみるとき顏の熱くなるのを覺える。それでも一回から四、五回までの學生とはゼミナールを通じ學友會の仕事を通して親交を結んだ。自分も若かつたし學生の方も近づき易かつたせいもあらう。ゼミナールなぞは時間を超越して薄闇くなつて會食に續くといふ風だつた。それが何時の間にか「怖い先生」になつてしまつたのは轉た感慨なきを得ない。型に嵌つた先生となつてしまつたらしい。

二十年も經過するうちには變動の少い本校にも多少の變化はあつた。若い敎授が出來た。けれども私達當時の若い敎授連中から見ると當時すでに老大家と思はれた先輩諸敎授が多數今なほ健在でゐられるので、やつぱり「若い者」としての氣持は拔けない。二十五歲で最年少の先生だつた森田敎授でさへも既に四十を二つ三つ越した昨年のある講義の時間に私は「われわれ若いものは」とやつて學生から拍手喝采されたが、年齡の絕對數は殖えても先輩諸敎授との年齡の相對數は變らず、老大家が多數健在であることが、私をして未だに二十年前の若さの錯覺を起させる。有り難いことだ。

學友會の會則も出來て事業を始めようとしたけれども中々手がつけられぬ。雜誌の發行も出來ず、音樂部にしても行ふに場所なく、運動に關する部では運動場がない。わづかに他の場所を借りて庭球、野球をやつた。庭球の中に含まれてゐた卓球も間に合はせの卓球臺でやつた。他のすべての部の活動は開校第二年この不二見ケ丘に登つてから始つたのである。

×

その後學校の教職員も多くなり生徒の數も急に增し、家族的なものからより高度の集團に發展した。そして組織立つた。それは塾より學校への推移と似て居らう。併しながらその爲に何か忘れられたものがあるやうである

×

學友會の豫算案作成に就て所謂幹事會を行ふこと十數年、昭和十五年秋學友會が發展的解消をなすまでにはいろいろの思出がある。幹事は年々入代るけれども私はとう〳〵代ることがなかつた。毎年新になつた幹事が集まるので他の部の事を知るものが極めて少い。中には自己の責任の部の事すら知らずに意見を述べる。私が少しでも意見を挾むとその部に可成大きな影響を及ぼすので多くは沈默を守らねばならない。衆議に對し決を採るときの方法にも注意を要する。そして段々と改良した。常に總ての部を同一視することを考へて來た。他の會議ならば適宜の進行をやるのにと思ひながら、隨分時間を長引かせて了つた事もある。

×

兎に角殿々乎として進歩し發展を續けて二十年の記念の日の近い今日、同類の學校中に比類のない名聲をかち得たのは、開校當初によき出發あらしめた田尻校長の人格、識見の偉大さの然らしめる所である。

係の方から何でも書けとのことであつたから、命これ從ふの氣持でその通り何でも書いた。失禮の點は御海容を希ふ次第である。

若原竹次

（第一回卒業生）

今ヤ母校創立二十周年ヲ迎ヘントスルニ當リ、校運ハ隆々トシテ昂マリ名實共ニ日本一ノ高商トナリツヽアルコトハ、吾々同窓生ニトリテハ此上モナイ大キナ歡ビデアル。又恩師田尻校長ハ位人臣ヲ極メ、而カモ尙聖鑾トシテ壯者ヲ凌グノ概アルハ、母校ノ隆運ヲ如實ニ象徴スルモノトシテ寔ニ慶賀ニ堪ヘナイ次第デアル。此ノ秋ニ當リ二十年史編纂委員ノ乞ハルヽヤヽニ創立當時ヲ回顧スルノモ一興デアラウ。顧ルニ母校ハ關東大震災ノ直後横濱市ノ復興ガ極メテ困難視セラレタ大正十三年四月ニ創立セラレタ。創立當初ノ約半ケ年間ハ横濱高工ノ假建築ニナル校舍ノ一部ヲ借用シテ授業ヲ受ケタガ、假建築トハ名ノミニテ唯風雨ヲ凌グニ過ギナイ御粗末ナバラックデアツタト記憶スル。運動場モソノ一隅ヲ屑身狹イ思ヒデ使用シテヰタモノデアル。當時ノ吾々ノ大キナ希望ノ一ツハ一日モ早ク自分等ノ校舍デ授業ヲ受ケルコトデアツタ。現在ノ如キ不燃性建築ノ校舍、且ツ體育館、プ

ール等ヲ持ツガ如キハ望外ノモノトシテ夢ニモ思ハナカツタ。

當時ノ横濱市ハ本牧、磯子方面ノ一部ヲ除キ、街ハ殆ンド見ル影モナキ廢墟ト化シ、此處彼處ニハ未ダ燒殘リノ家屋ノ殘骸ガ點在シテ、之等ヲ取リ除クト時々人間ノ黑燒ガ出テ來タモノデアル。當時ノ横濱ハ家屋ノ密集セル大都市ノ風格ハ何處ニモナク燒野ケ原ニバラツク建ノ家ガ散在シテヰタニ過ギナイ。現在下宿難ノ聲ヲ方々ニ聞クガ當時ニ比ブレバ比較ニナラナイト思フ。下宿屋ハ殆ンドナク普通ノ民家ニ頼ミ込ンデ無理ニ宿泊サセテ貰ツタモノデ下宿サヘ出來レバ廣イ狹イハ問題デナカツタ。入學當初僕ハ高工カラ二、三町離レタ某家ニ假ノ宿ヲ求メタガ、八疊ト四疊半ノ二室ニ、高商生四人、高工生二人ガ雜居シテヰタ、ト云ヘバ一寸信ジナイ人ガアルカモ知レナイ、ガ僞リノナイ眞實ノ話デアル。ソレデモ吾々ハ有難イト感謝シテヰタコトヲ記憶シテヰル。

「横濱高商ハ帝都ニ於ケル唯一ノ官立高等商業ナレバ諸子モ亦之ヲ自覺シ、勇往邁進勉學ニ努メ全國一ノ高商タラシメヨ」。トハヨク校長先生ノ口ヲ衝イテ出ク言葉デアル。然ルニ最近デハ斯ル熱辯ヲ餘リ聞カナイトノコトダ。此レ校長先生ノ希望ガ實現シ、文字通リ帝都ニ於ケル唯一ノ官立高商ノ貫錄ガ出來、最早之ヲ再々絶叫セラルヽ必要ガナクナツタカラデアラウト祝福セザルヲ得ナイ。

斯ル思ヒ出ハ筆執レバ幾ラデモアル樣ニ思フ。然シ紙面ノ少イ本欄ヲツマラヌコトデ埋メルノヲ遠慮スル。

今ヤ大東亞戰第二年ヲ迎ヘ、此ノ聖戰ヲ勝チ抜クベク長期決戰態勢强化ノ叫バルヽ時、吾々ガ各職域ニ於テ挺身奉公ノ誠ヲ盡クシ得ルハ偏ヘニ學恩ノ賜ト云フベク、今後吾々同窓生ハ一致團結シテ相貫メ相輔ケ、以テ母校ノ名譽ノ爲又邦家ノ爲、益々精進センコトヲ念願シテ筆ヲ措ク次第デアル。以上

三回生の思ひ出

武藤正平
（第三回卒業生）

私は大正十五年四月に入學して昭和四年三月卒業した三回生の一人である。入學當時は横濱の町はまだ大震災の餘燼が殘つて所謂バラック建の家並が多く、區劃整理も進行中で道路等も方々掘りかへされてゐた。たゞ學校は現在の白堊の偉容が丁度完成して、私達の入學した時から本校舍に全部入ることが出來たのであるから云はゞ一番幸せな生徒であつた。私が入學許可證を貰つて喜びや色々の屆書を差出しに行つたときは、教務課が今の商品實驗室にあり、餘りビカ〳〵にきれいなので裸足で恐る〳〵入つて行つたことを覺へてゐる。私が出た中等學校も震災でやられた爲め、ひどい假屋で過したから當時高商の建物の立派なのは特に感銘が深く、入學式の日などは、本當に涙ぐむ程に嬉しかつたものである。

私等が入學した年の秋、創立記念祝典が盛大に行はれ、當時の文相岡田良平閣下が臨席された。何でも九月の終りから十月の中ばにかけて、生徒の方にも色々の催しものが行はれたことを今でも、よく覺へてゐる。各教室に飾りつけをやつたが私共の組と隣りの組とが期せずして同じ樣な趣好になつて了つて驚いものだつた。私共の

方は誰かの發案で部屋の眞ん中に綠の丘をこしらへ、りんごの木などを配してその下に生徒が一人寢そべつて居り、窓側の方へ人の一生を象徴的に配した六つの區劃を設けて、赤坊から爺さんになつて、しまひに墓場をおくといつた按配にしてあつた。寢そべつてゐる上の壁に Tell me not in mournful numbers, Life is but an empty dream といふ有名なロングフエーローの詩がでか〳〵とかいてある。今から思へばたわいのない少年の感慨を示したものであつた。それでも窓の方の「青春時代」の區劃にはおみくじ等をおいて來客に自由にひかせる等の趣向があつて、中々人氣を集めたのは大出來だつた。所が當日いざふたをあけて隣室に入つて見ると、これ又部屋の中央に大きな寢臺をしつらへ生徒が一人寢てゐる、その上の壁に大きな紙が張つてあつて「寢臺白布之ヲ父母ニ受ク、敢テ起床セザルハ孝ノ始メナリ」と漢文で書いてある。見物人の曰く「高商の生徒さんはよつぽど朝寢がすきなんだわ」と。これには一寸弱つたことを今も忘れない。記念講演會には福田德三博士が來て熱辯を振つたし、音樂會も、大變な滿員で、私の記憶する限り、この時程あの山に市民を集めたことはその後にも皆無だつたと思ふ。

兎に角、時代は已に二十年も前で、今と時勢が全く違ひ、自由主義華かなりし頃だから、今から見れば飛んでもない事が平然と行はれてゐたし、私共も若い元氣一杯の頃だから空想的なのが實現したこともあつたのである。學業の點についても、今とかなり異つた空氣が張つてゐたことは當然で、英語等が盛んで、ミルの自由論や、沙翁のシーザー等を課外でやつたことも覺えてゐる。外國語劇等も私共が二年になつた時から俄然盛大となり、當時盛んだつた築地小劇場から新劇の衣裝をそつくり借りてきて、ウヰリアム・テルだのラ トスカだの群盲（メーテルリンク）だのフアウストだの一流の出しものを、本職そこのけでやつてのけたものである。私は三年になつたときフアウストを出したが、初めの書齋の場で、地靈が煙りと共に忽然と現はれる所で、餘り凝りすぎて、花火の煙硝が强すぎ、物凄い顏をした地靈が Im Lebenssturm, im Tatensturm, wall ich auf und ab といふ所でクション〳〵と嚔をしてしまつたのである。嚴肅で息づまる場面だから、その時の可笑しさは又別段で、大喝采しばし鳴りもやまなかつたといふ珍芝居をやらかした。むづかしい經濟理論や貸借對照表論は大方忘れて了つたがこんな事だけ昨日の出來事の樣に覺えてゐるのは致し方ない。

校旗が初めて出來てその推戴式があつたり、御眞影御下賜でその御迎へ式をやつた事等も印象深い出來事であつた。特に私共が三年になつた昭和三年秋、御卽位の大典が行はれ全國一齊に萬歲を奉唱した事は一番感銘の强かつた事であつた。あの日の町の雜踏等も今思ひ出に强く殘つてゐる。

私共の卒業した昭和四年が就職難の序の口で、卒業は皆に心配の種となつたものであつた。現在の世相と比べると全く天地の差があつたのである。今の學生諸君にはとても話してもわかるものでない。あの時の田尻先生の御奮闘が橫濱高商の名聲を一段と輝かしいものとし、その後の校運を拓いた大きな因をなしたものと信じ度い。

野球の强くなつたことも校名の喧傳には大きな役割をなしたがそれは實質的のものではない。學校の名聲は巢立つた生徒が各方面に於て出世することにあるわけだから學力、品性その他の要素の具備と、これを有効に使用

する舞臺を必要とする。その意味で就職問題が旨く行くことは、實に大きな要素となるわけである。古い卒業生の大部分はその意味で學校に對する恩義は、現在の存在をかけたる程に大きなものであり、これが又愛校心となつて無限に母校の發展に負ふ所があるわけである。

思ひ出は盡くる所なく綴くが若い時代のたわいのない出來事も二十周年といふ機會に、この上もなく懐かしく蘇つて、

Ihr bringt mit euch die Bilder froher Tage,
Und manch' liebe Schatten steigen auf,
Gleich einer alten halbverklungnen Sage,
Kommt erste Lieb und Freundschaft mit hernuf.

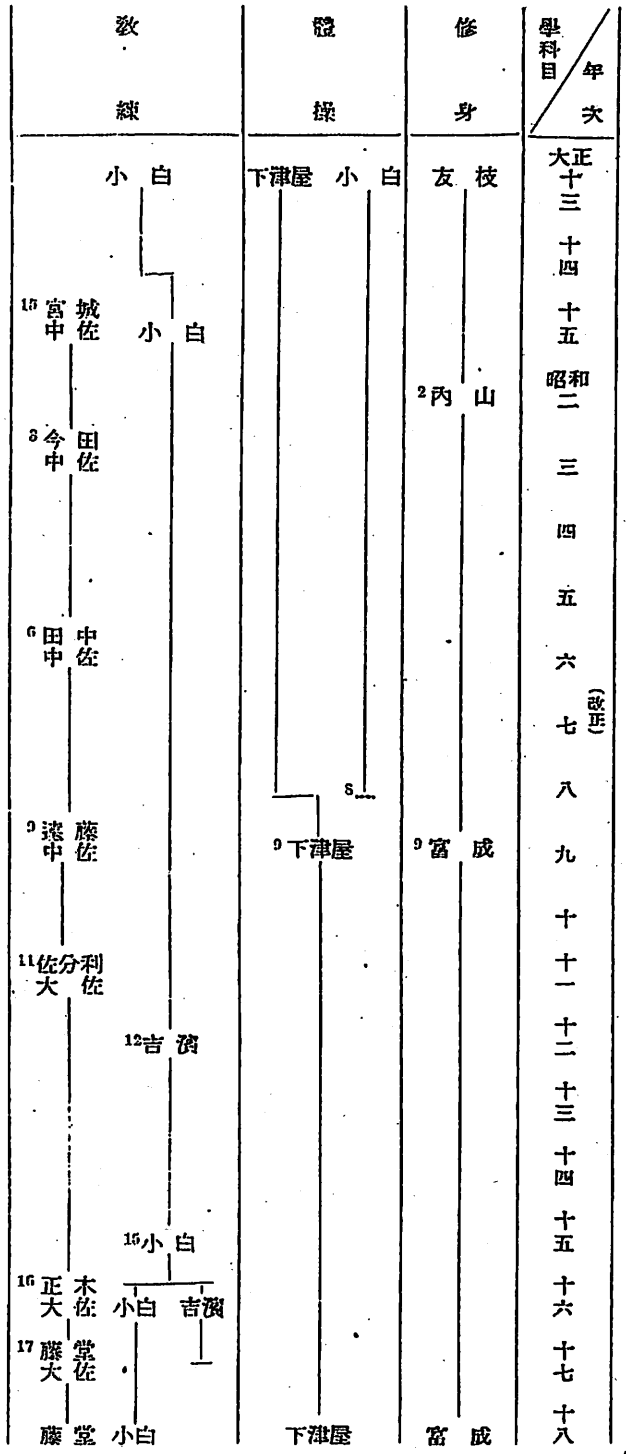
の感慨更に痛切なるものがある。

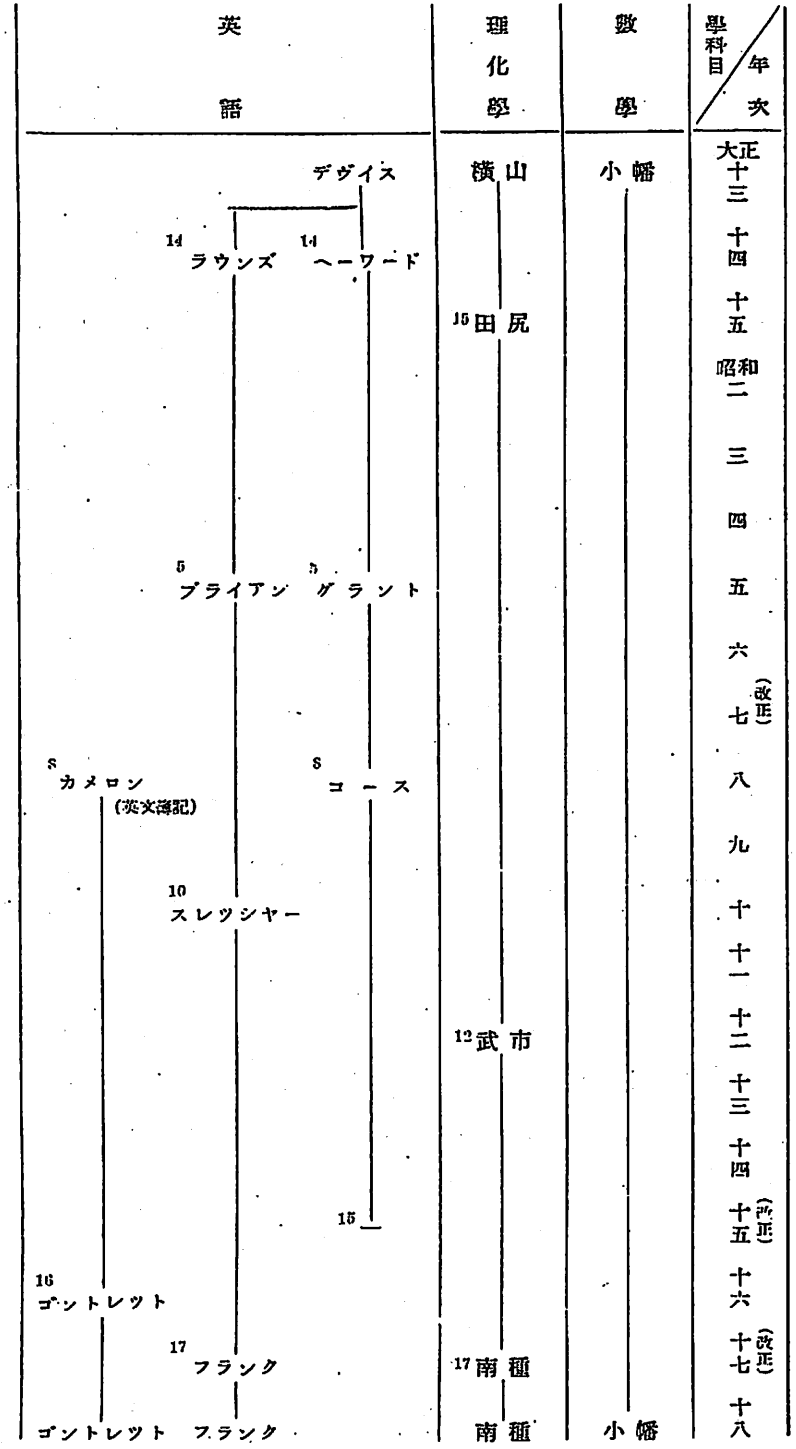
時代は將に急轉回して國家、個人の運命と共に富士見丘の母校の行く手は多事である。二十年の星霜を閲した我々の母校は將に青年期に達して今後の活躍が愈々期待される。今後の發展を衷心より祈つて拙ない思ひ出を終る。十八年三月某日

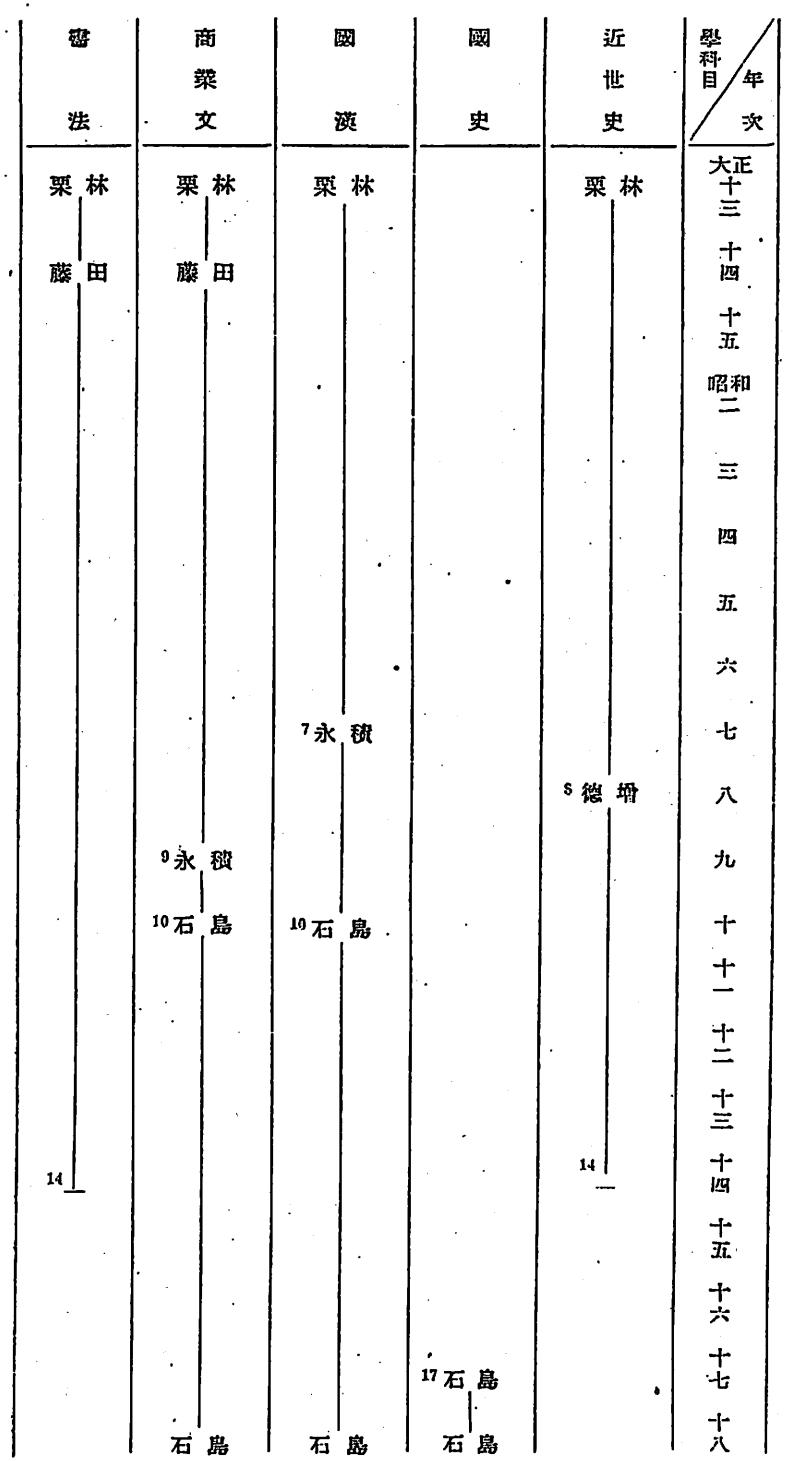
附表

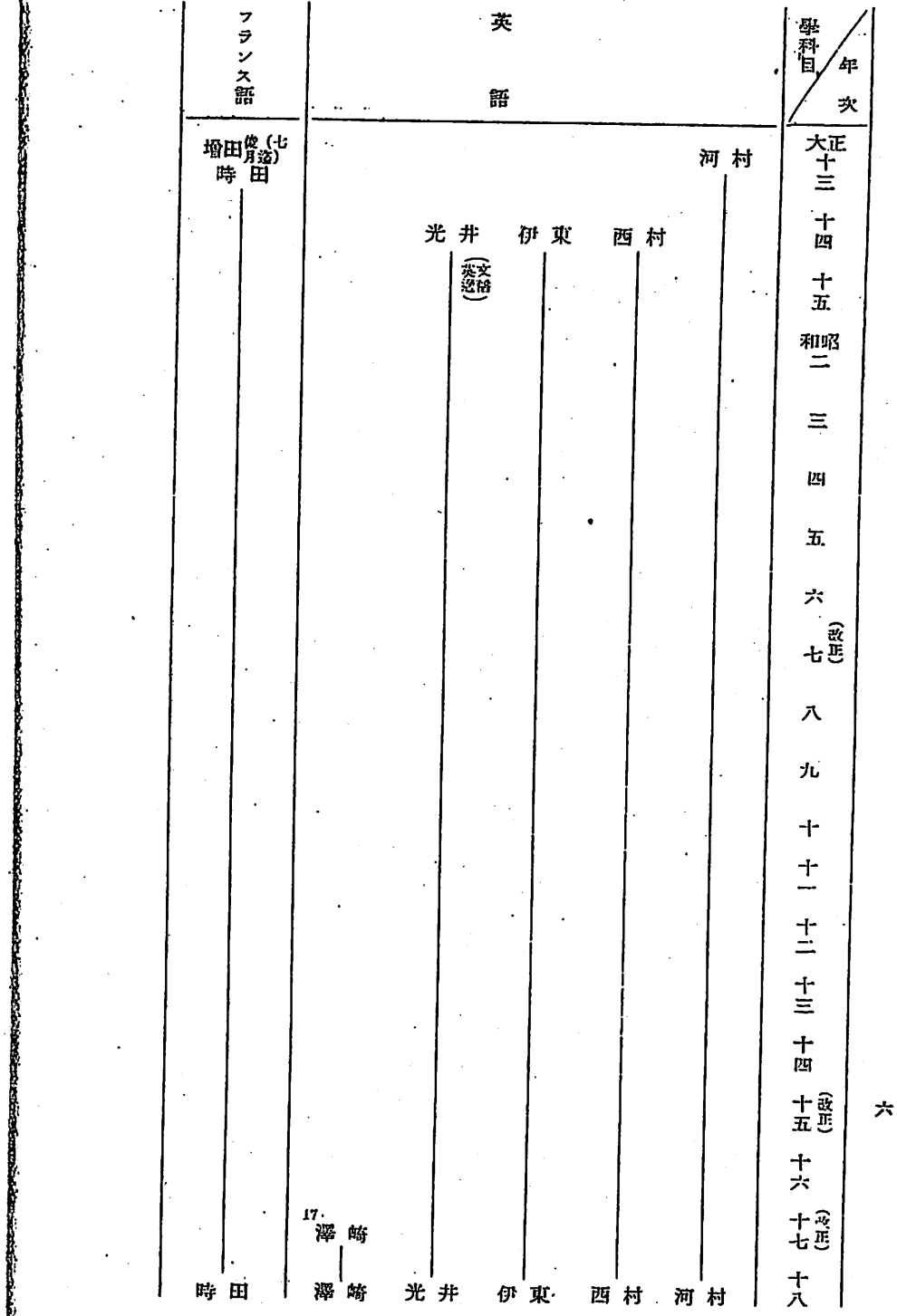
一　教官擔當科目異動表
二　生徒主事異動表
三　年表
四　十五年以上勤續者

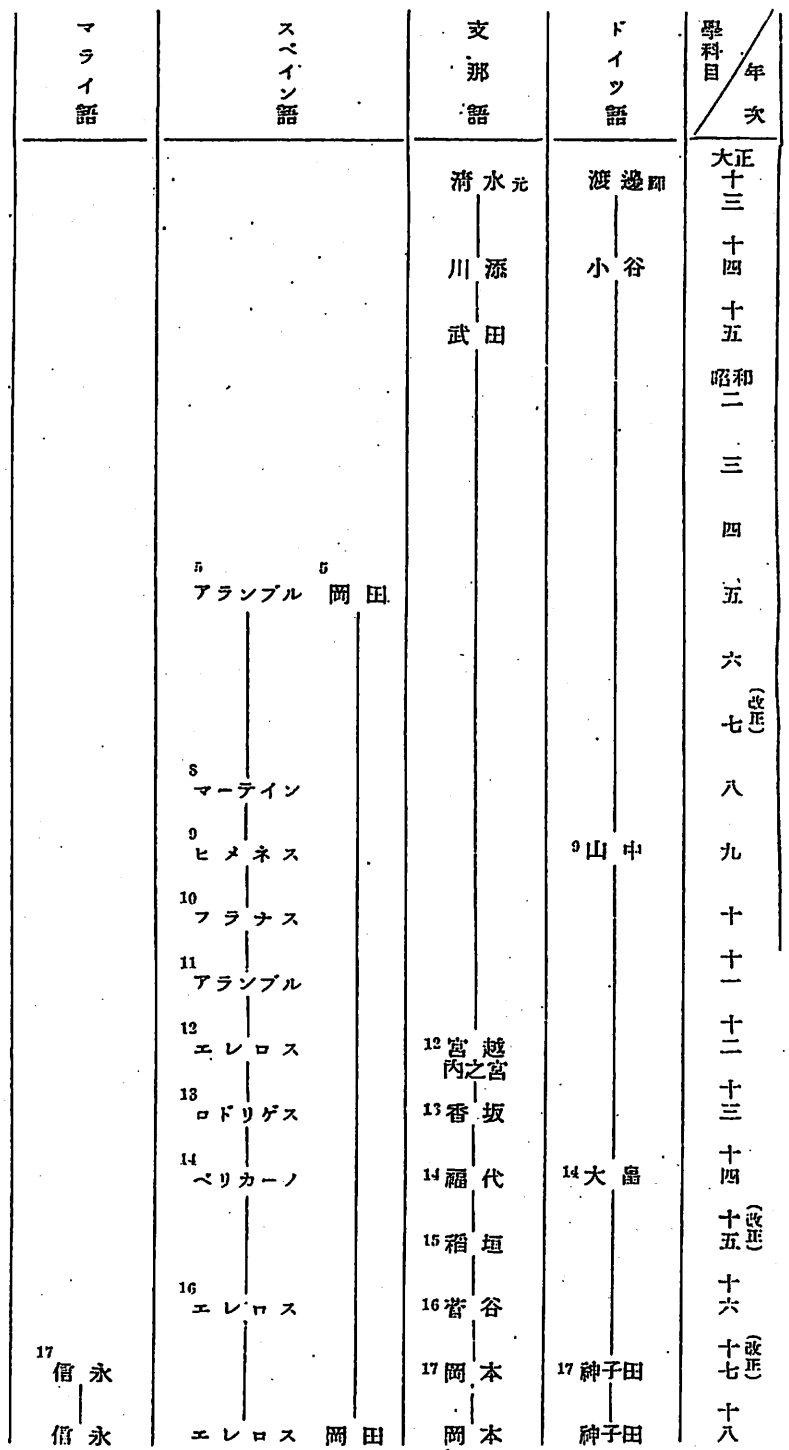
教官擔當科目移動表

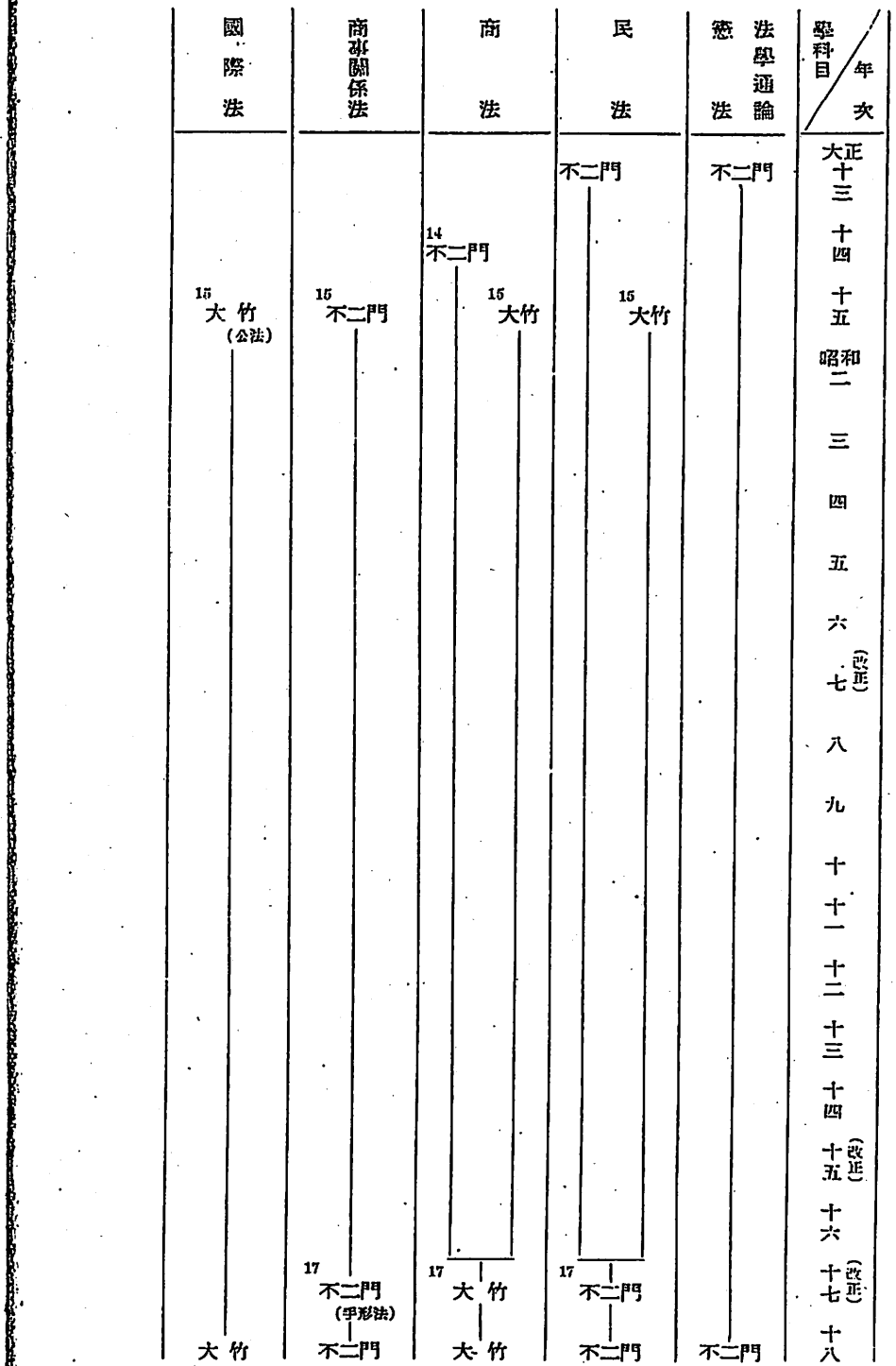


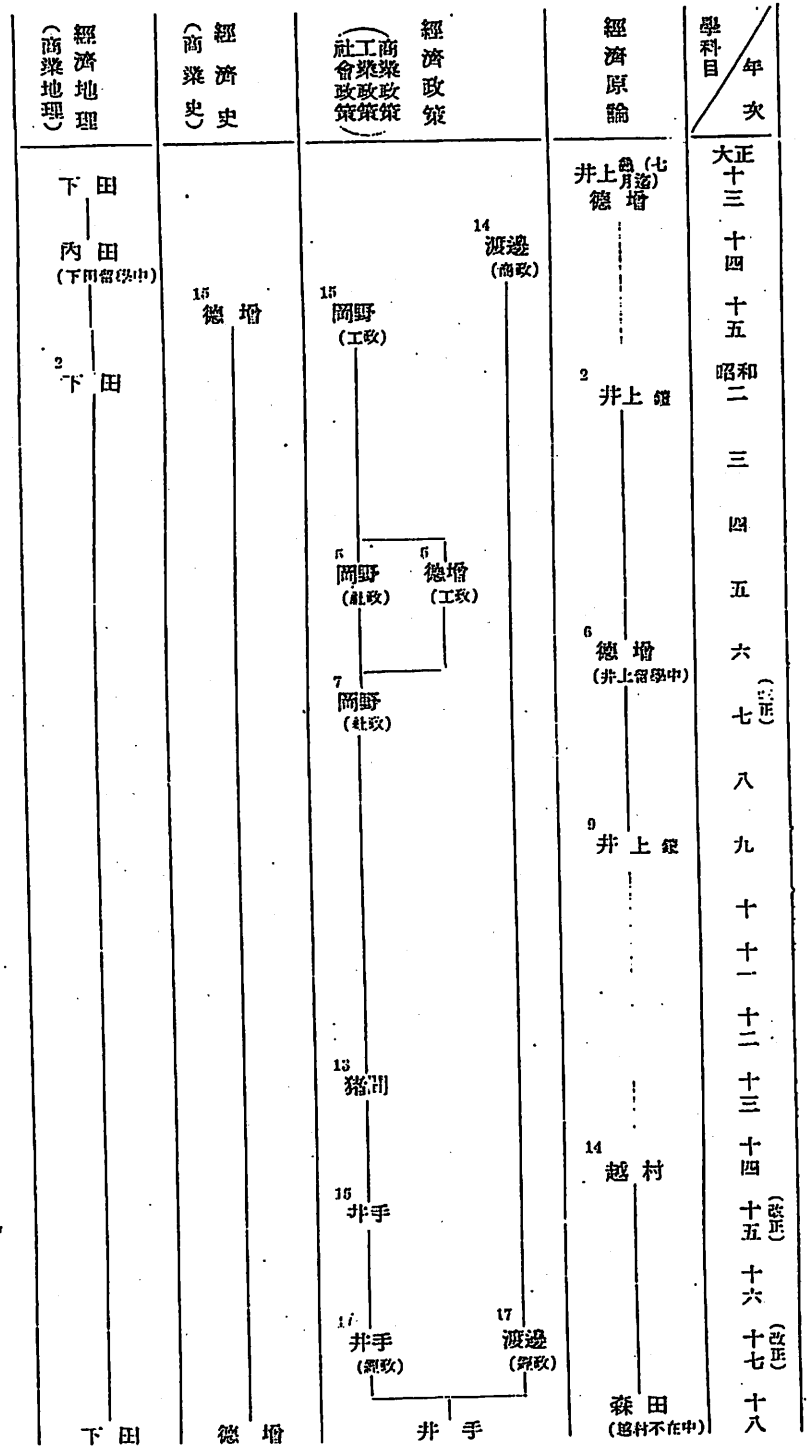

英語
理化學
數學
學科目／年次
デヴイス
14 ラウンズ
14 ヘーワード
15 田尻
5 ブライアン
5 グラント
8 カメロン
(英文藻記)
8 コース
10 スレツシヤー
12 武市
15
16 ゴントレツト
17 フランク
17 南種
ゴントレツト
フランク
南種
横山
小幡
小幡
大正十三
十四
十五
昭和二
三
四
五
六 (改正)
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四 (改正)
十五
十六
十七 (改正)
十八

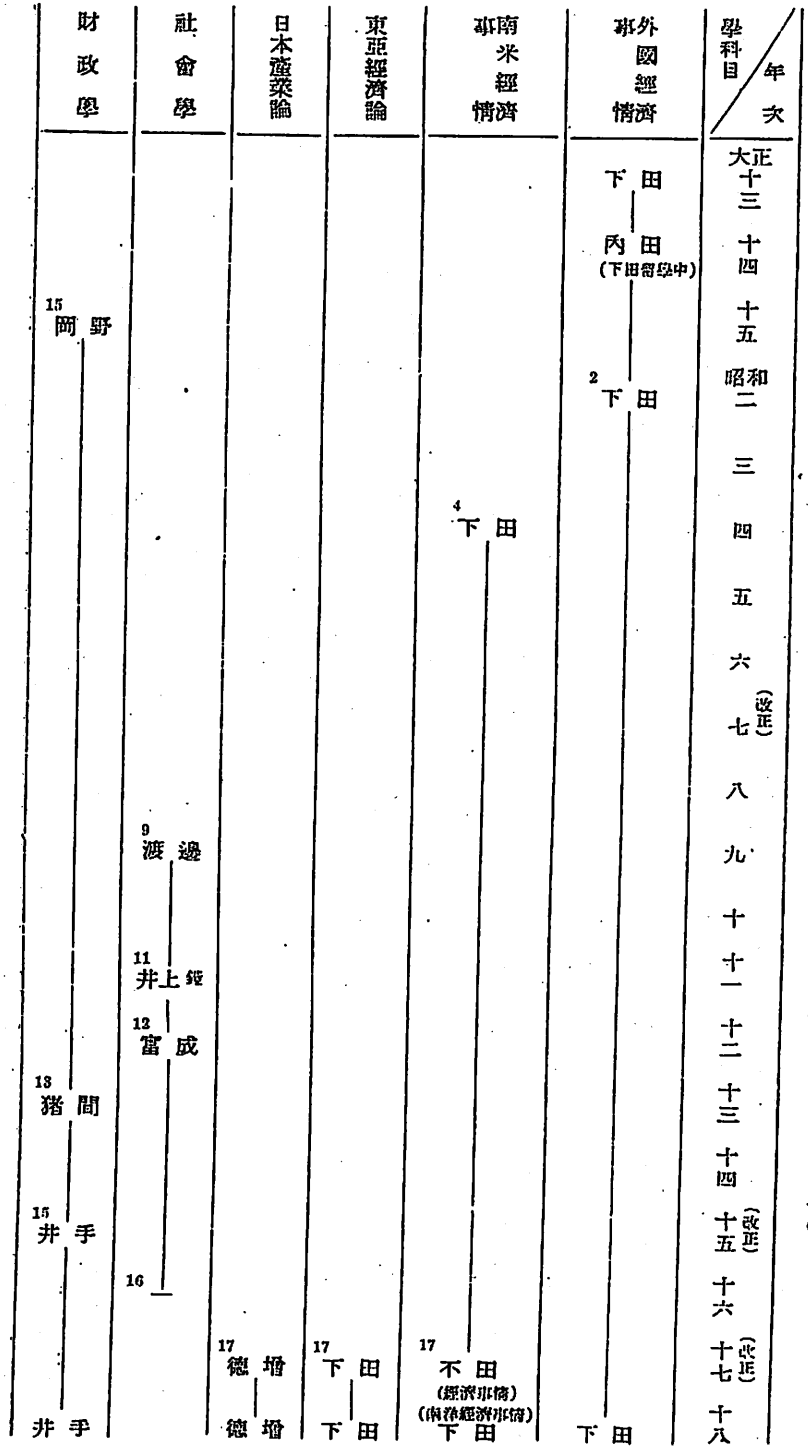

書法
商業文
國漢
國史
近世史
學科目／年次
栗林
藤田
14
栗林
藤田
9 永積
10 石島
石島
栗林
7 永積
10 石島
石島
17 石島
石島
栗林
8 徳増
14
大正十三
十四
十五
昭和二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八

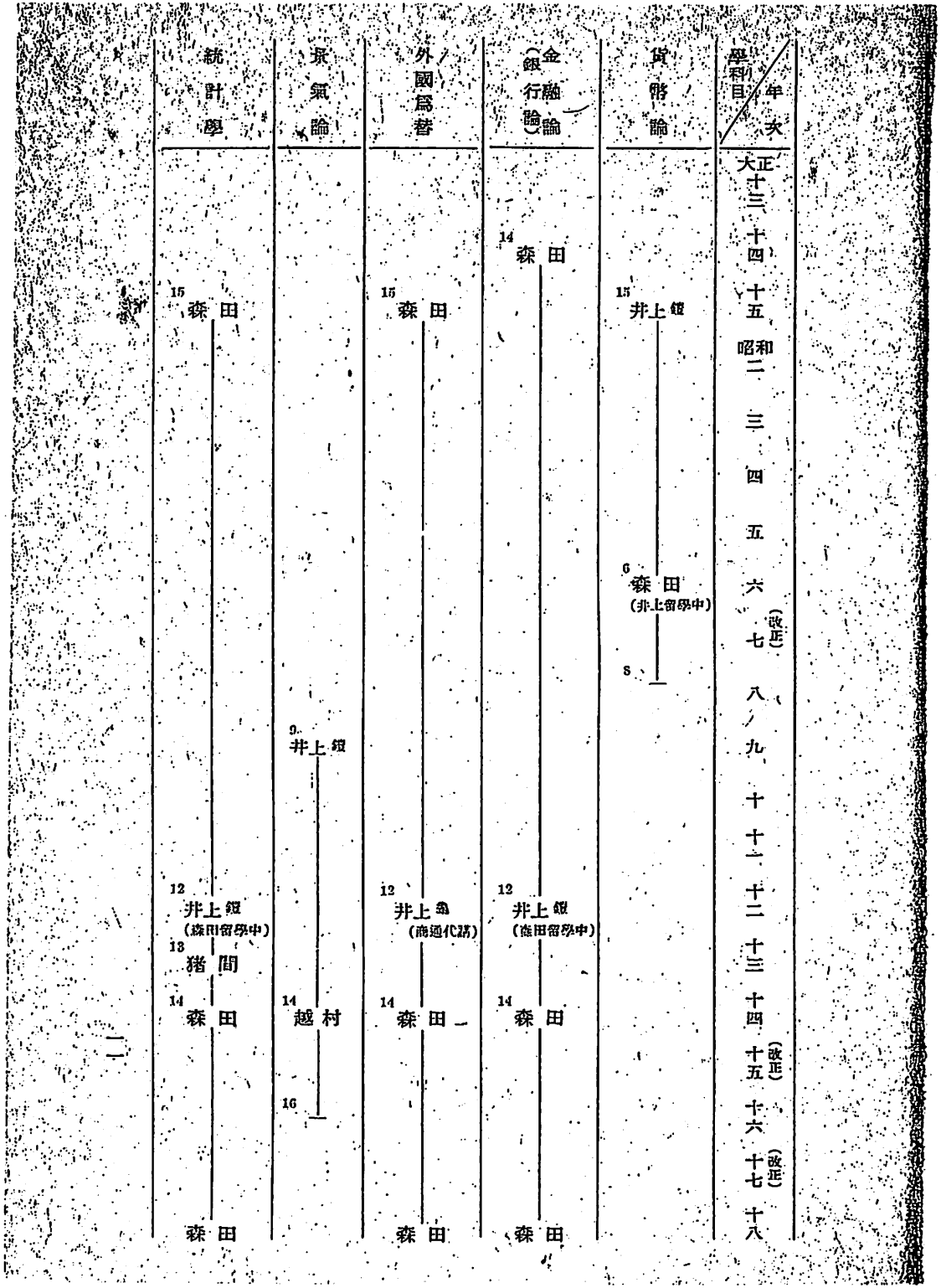

學科目／年次
英語
フランス語
大正十三
十四
十五
昭和二
三
四
五
六（改正）
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四（改正）
十五
十六（改正）
十七
十八
河村
西村
東伊
井光（文検英語）
澤崎
時田（七・一〇追）
時田（改正）
澤崎
井光
東伊
村西
村河

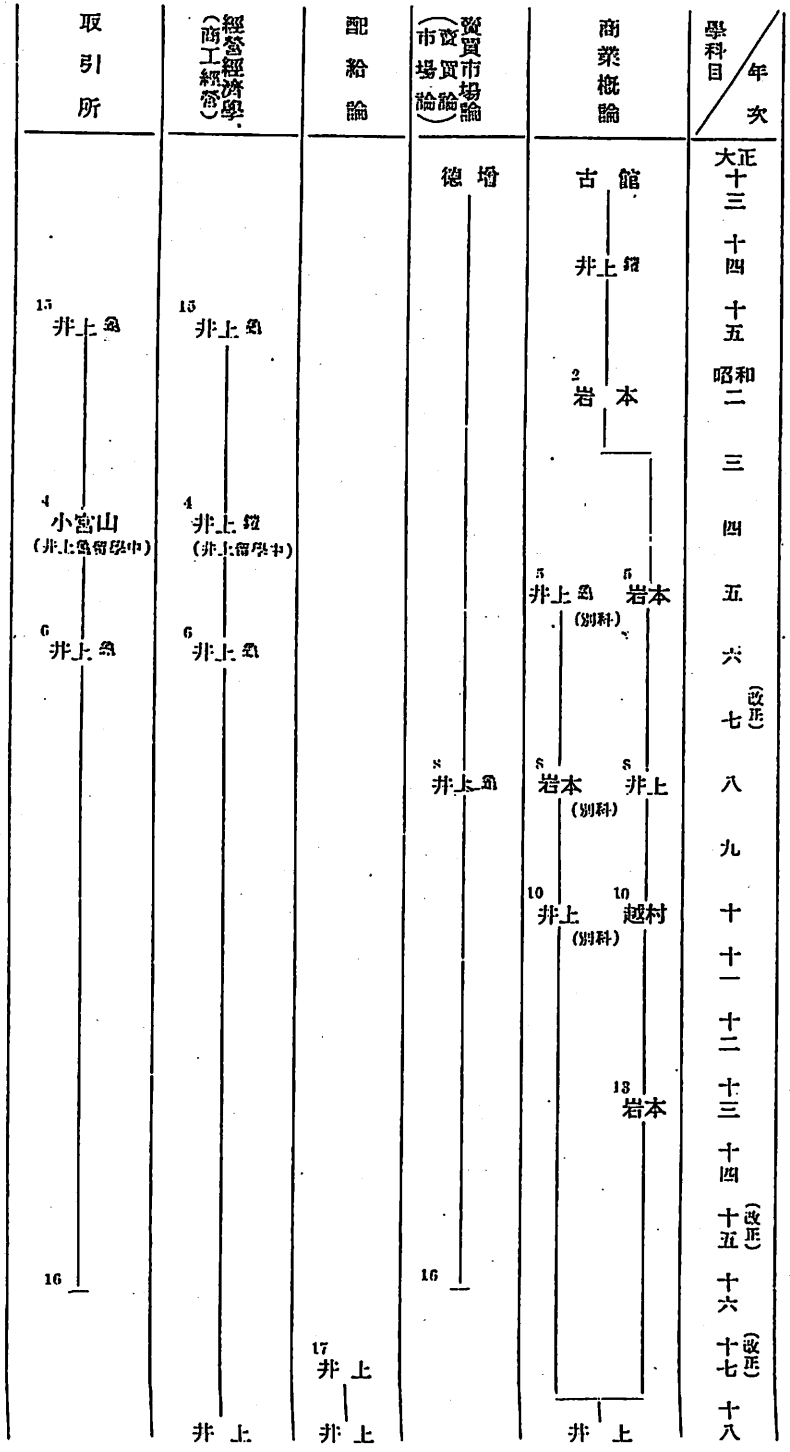

學科目／年次
ドイツ語
支那語
スペイン語
マライ語
大正十三
十四
十五
昭和二
三
四
五
六（改正）
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四（改正）
十五
十六（改正）
十七
十八
渡邊（即）
小谷
中山 9
大畠 14
神子田 17
元水清
添川
田武
越宮内之宮 12
坂香 13
代福 14
垣稲 15
谷嵜 16
本岡 17
岡田 5
アランブル 5
マーテイン 8
ヒメネス 9
フラナス 10
アランブル 11
エレロス 12
ロドリゲス 13
ペリカーノ 14
エレロス 16
永信 17
岡本
神子田
エレロス
永信

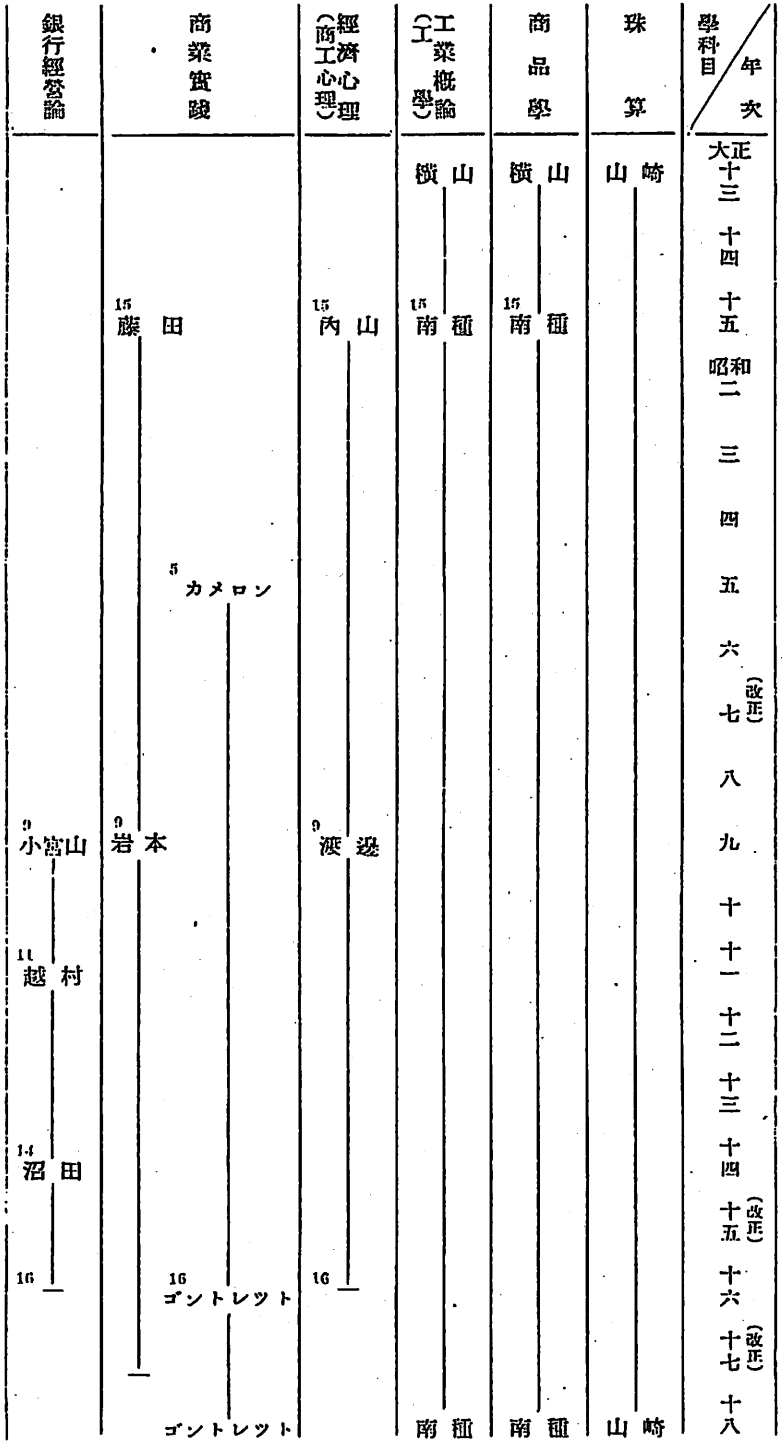

學科目 / 年次
大正十三 十四 十五 昭和二 三 四 五 六(改正) 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四(改正) 十五 十六(改正) 十七 十八
法學通論 憲法
不二門
不二門
民法
不二門
15 大竹
不二門
17 不二門
不二門
商法
14 不二門
15 大竹
17 大竹
大竹
商事關係法
15 不二門
17 不二門 (爭形法)
不二門
國際法
15 大竹 (公法)
大竹

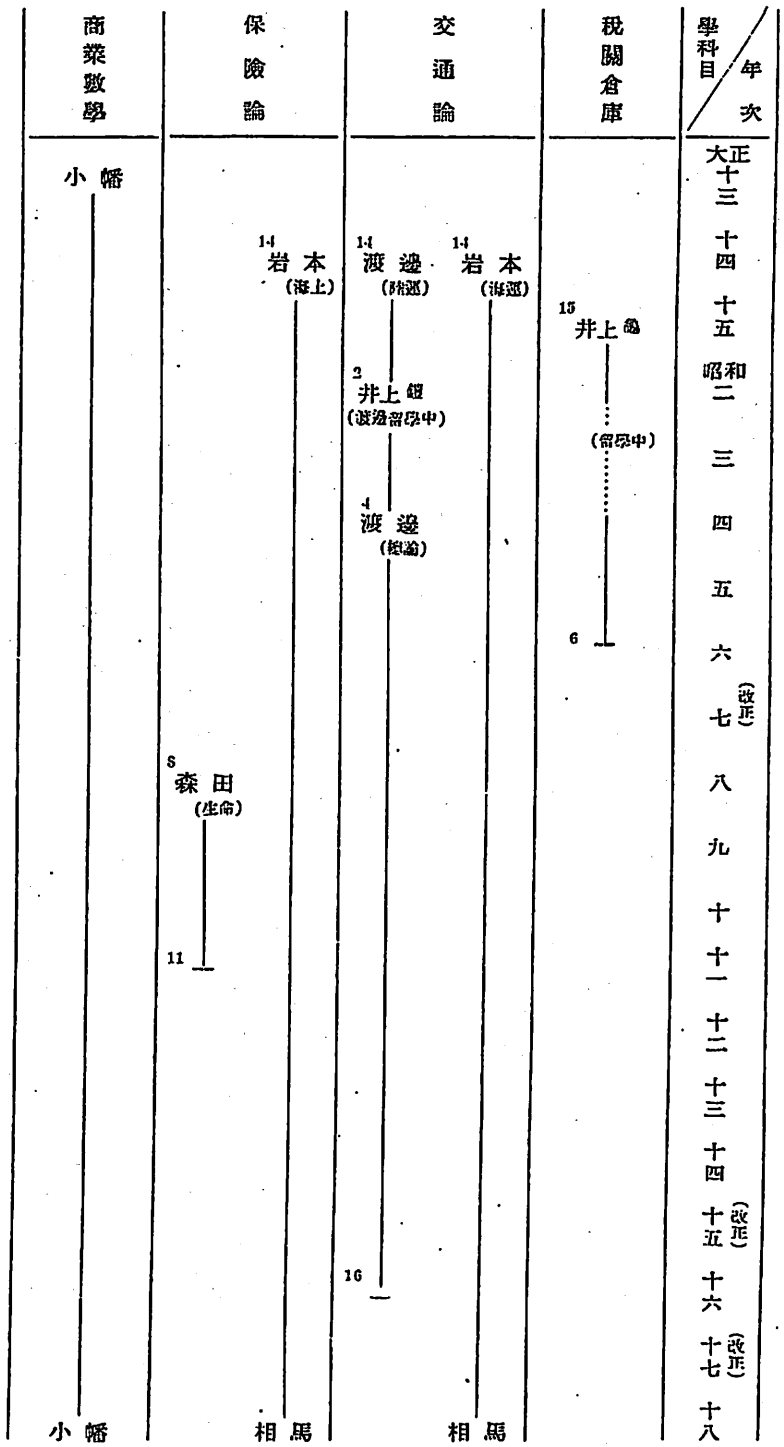

學科目 / 年次
大正十三 十四 十五 昭和二 三 四 五 六(改正) 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四(改正) 十五 十六(改正) 十七 十八
經濟原論
井上 德增 (七月退)
2 井上 館
6 德增 (井上留學中)
9 井上 館
14 越村
森田 (越村不在中)
經濟政策 (商業政策 社會政策 工政)
14 渡邊 (商政)
15 岡野 (工政)
5 岡野 (社政)
6 德增 (工政)
7 岡野 (社政)
13 猪間
15 井手
17 井手 (經政)
17 渡邊 (經政)
井手
經濟史 (商業史)
15 德增
德增
經濟地理 (商業地理)
下田
內田 (下田留學中)
2 下田
下田

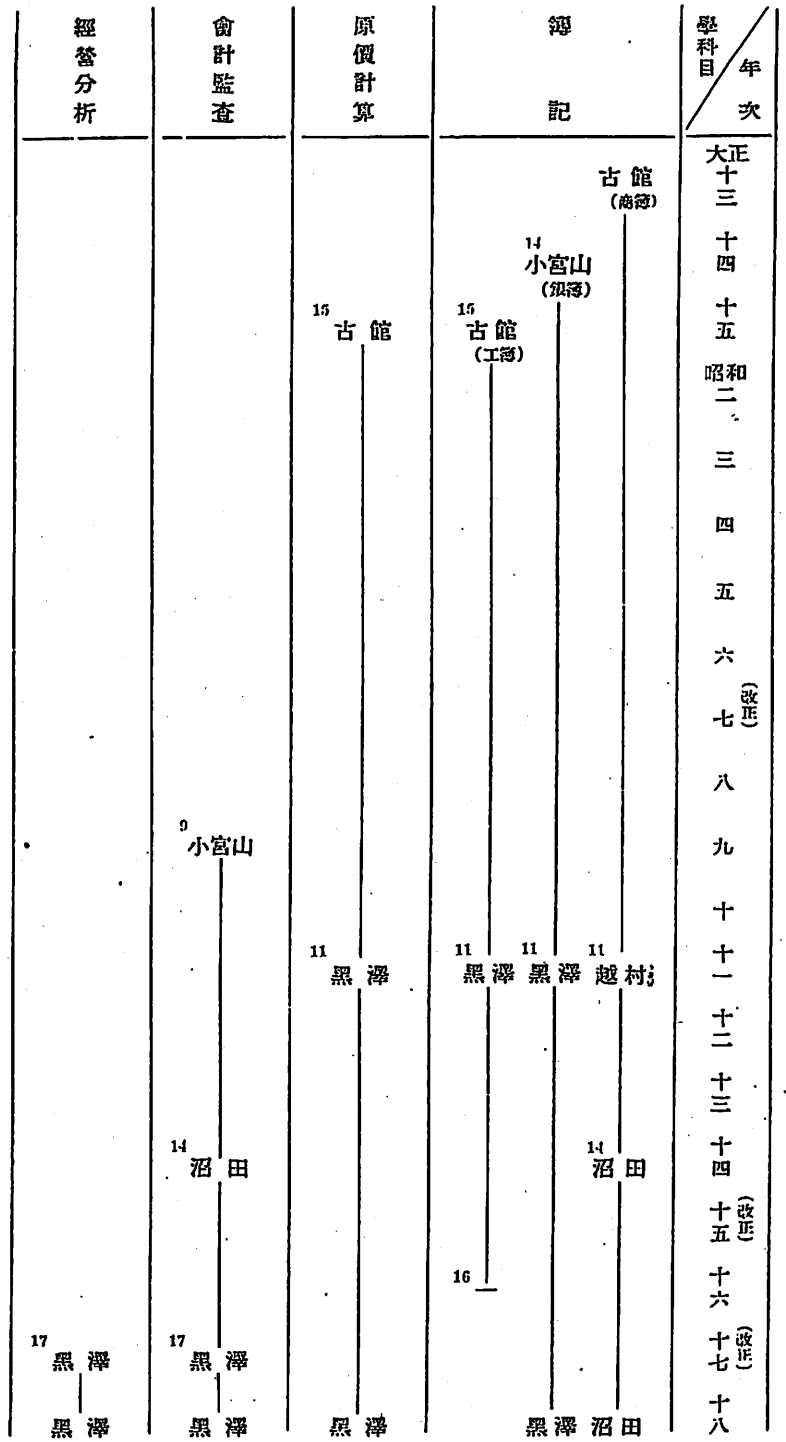

學科目／年次
大正十三
十四
十五
昭和二
三
四
五
六（改正）
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四（改正）
十五
十六（改正）
十七
十八
外國經濟事情
下田
內田（下田留學中）
2 下田
下田
南米經濟事情
4 下田
17 不田（經濟非情）（南洋經濟事情）
下田
東亞經濟論
17 下田
下田
日本產業論
17 德增
德增
社會學
9 渡邊
11 井上鍵
12 富成
16
財政學
15 岡野
13 猪間
15 井手
井手


學科目／年次
大正十三
十四
十五
昭和二
三
四
五
六（改正）
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四（改正）
十五
十六（改正）
十七
十八
貨幣論
15 井上鍵
6 森田（井上留學中）
8
金融論（銀行論）
14 森田
12 井上鍵（森田留學中）
14 森田
森田
外國爲替
15 森田
12 井上鍵（商通代講）
14 森田
森田
景氣論
9 井上鍵
14 越村
16
統計學
15 森田
12 井上鍵（森田留學中）
13 猪間
14 森田
森田

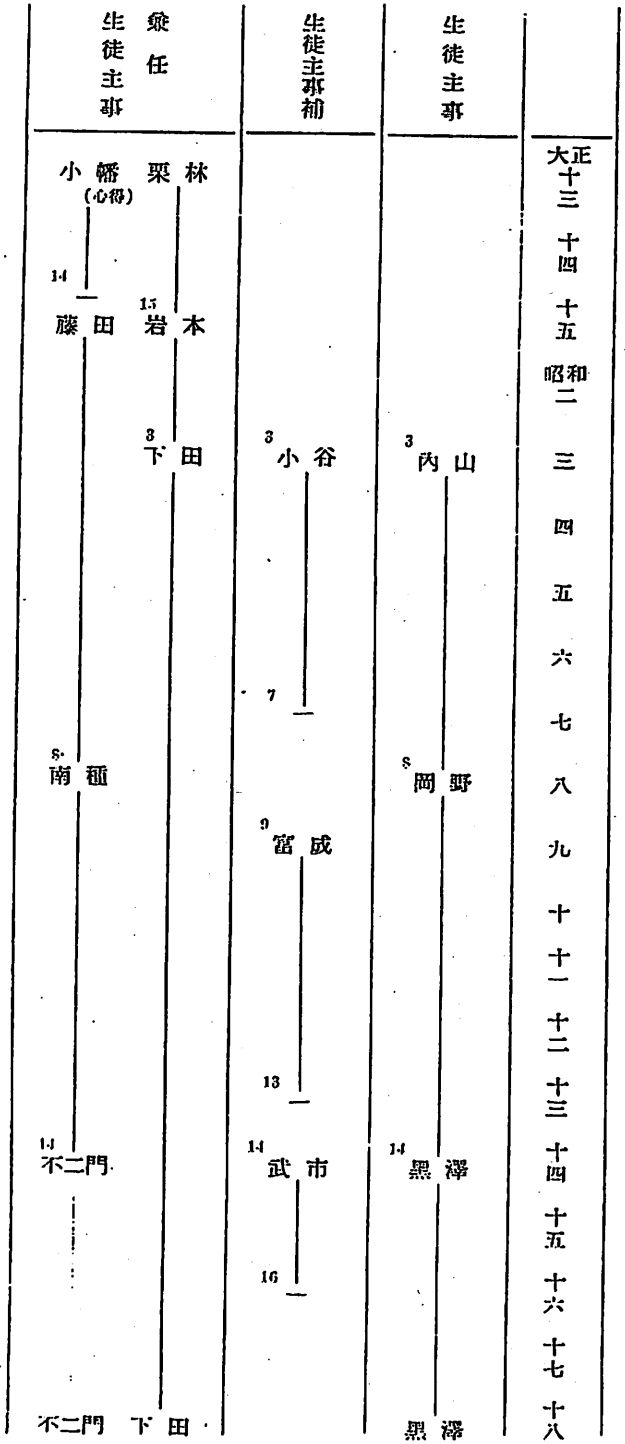

學科目 / 年次
大正十三 十四 十五 昭和二 三 四 五 六 七(改正) 八 九 十 十一 十二 十三 十四(改正) 十五 十六(改正) 十七 十八
經濟學史
7 德增
13
15 非手
16
經濟大意
5 德增
14 越村
德增
(越村不在中)
貿易大意
10 德增
15 非手
非手
植民政策
5 岡野
9
農業大意
5 清水彦
8 福田
16 井上密
井上密
商業概論
古館
井上館
2 岩本
5 井上勇 (別科)
5 岩本
8 岩本 (別科)
8 井上
10 井上 (別科)
10 越村
13 岩本
井上
資賀市場論(資賀論市場論)
德增
8 井上勇
16
配給論
17 井上
井上
經營經濟學(商工經營)
15 井上勇
4 井上館 (井上館學中)
6 井上勇
井上
取引所
15 井上勇
4 小宮山 (井上勇留學中)
6 井上勇
16


學科目／年次
大正十三 十四 十五 昭和二 三 四 五 六(改正) 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四(改正) 十五 十六(改正) 十七 十八
珠算
山崎
山崎
商品學
横山
南種
南種
工業概論(工業學)
横山
南種
南種
經濟心理(商工心理)
15 内山
16
渡邊 9
商業實踐
15 藤田
9 岩本
5 カメロン
16 ゴントレット
ゴントレット
銀行經營論
9 小宮山
11 越村
14 沼田
16


學科目／年次
大正十三 十四 十五 昭和二 三 四 五 六(改正) 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四(改正) 十五 十六(改正) 十七 十八
税關倉庫
15 井上 幽
(留學中)
6
交通論
14 岩本 (海運)
相馬
14 渡邊 (陸運)
2 井上 毅 (渡邊留學中)
4 渡邊 (陸運)
16
相馬
保險論
14 岩本 (海上)
相馬
5 森田 (生命)
11
商業數學
小幡
小幡


年次
学科目
大正十三 十四 十五 昭和二 三 四 五 六(改正) 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四(改正) 十五 十六(改正) 十七 十八
簿記
館(商経)
14 小宮山(狐崎)
15 古館(工経)
11 越村
11 黒澤
11 黒澤
14 沼田
16
沼田 黒澤
原価計算
15 古館
11 黒澤
黒澤
会計監査
9 小宮山
14 沼田
17 黒澤
黒澤
経営分析
17 黒澤
黒澤

生徒主事異動表


年次
学科目
大正十三 十四 十五 昭和二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八
生徒主事
3 内山
8 岡野
14 黒澤
黒澤
生徒主事補
3 小谷
7
9 富成
13
14 武市
16
兼任
生徒主事
小幡(心得)
14 藤田
15 岩本
3 下田
8 南種
14 不二門
林栗
下田 不二門

年表

年	月	社會事項	月	本校關係事項
大正七	四	未曾有の好況		
八	〃	東京商科大學設置		
九	〃	好況の反動 來り諸物價暴落す		
	九			原内閣―中橋徳五郎文相―高等諸學校の創設と擴張を計畫。
				本校は第十一高等商業學校として十四年開設の豫定と發表
一二	九	關東大震火災（一日）經濟界混亂狀態に陷る	一二	文部省直轄學校官制を改めて本校を加ふ。
〃	一一	國民精神作興に關する詔書下る（十日）		開設を一年早めて十三年とす（十月）
			一二	長崎高商校長田尻常雄本校校長を拜命す（十八日）
一三			三	第一回入學試驗を行ふ（二十七、八、九日）
			四	横濱高工假校舍に於て第一回入學式（二十一日）
			五	學友會組織さる
			六	本校敷地に建築工事起さる（十八日）
一四	三	東京放送局ラジオ放送開始（一日）	二	學友會誌第一號發行
		普通選舉法公布（五）	三	下田敎授渡歐
一五	五	天皇皇后兩陛下御成婚二十五年記念式典（十月）		
	一〇	中間國勢調査（一日）		
			三	生徒控室、柔劍道場竣工
			〃	本校假校舍へ移る
			六	岡田文部大臣來校
			〃	商後會（敎官研究發表會）第一回例會
			〃	對高工野球定期戰應援團發團式（三十日）
			七	對高工野球第一回定期戰（一日）
			一〇	學校一覽始めて作成
			〃	研究所規程成る
			一一	第一回陸上運動會（十五日）
			一二	野外演習（四、五日）
一五	一二	大正天皇崩御	三	本館建築成る
			五	夜學部開設
			〃	西村敎授渡歐
			一〇	校旗奉戴式（二十日）
			〃	開校式擧行、岡田文部大臣臨席（二十一日）
			一二	敎育勅語謄本奉藏（九日）
昭和二	二	大正天皇御大葬（七日）	三	開校記念論文集刊行（十日）
	三	明治節制定の詔書渙發さる（三日）	〃	第一回卒業式（十五日）
		金融恐慌、四月より九月までに休業せる銀行數三十七行に上る	五	體育館竣工
				渡邊敎授渡歐

一二　東京地下鐵「上野淺草間」開通

三　三　天皇皇后兩陛下の御眞影奉戴
　　四　大學高校の社會科學研究會解散を命ぜらる
　　五　濟南事件起り第三次山東出兵
　　一一　御卽位の大禮行はる（十日）
　　一二　敎育振興の御沙汰書下賜さる（十日）

四　三　天皇陛下横濱市に行幸遊ばさる（二十三日）
　　六　文部省學生部を設け思想取締を嚴にす。思想準擬學十一萬圓計上

六　高商新聞創刊（三十日）
一〇　〃　成人講座開講
　　第一回同窓會開催（二十七日）
一一　横濱高商新聞は第五號より横濱高商學報と改題
一二　寄宿寮竣工

四　光井敎授渡歐
五　勤勞令下り岡崎課增田彌之助氏學生三名應召
六　第一回寮祭
七　田尻校長渡支
一〇　生徒主事、主事補置かる
一二　第三學年生徒百三十名宮城前廣場にて御親閲を賜ふ（十五日）
　　御大典記念に校庭に椎を植ゆ

三　井上龜三敎授渡歐
四　商學會組織さる
五　德增敎授朝鮮滿洲へ出張
〃　貿易別科設置
六　對高工定期野球戰無期延期となる
七　商學第一號發行
一〇　開校五周年記念行事行はる

一〇　校歌成る
一一　田尻校長渡歐

三　貿易別科第一回卒業生を出す
七　田中文部大臣來校
〃　商大專門部との第一回對抗競技會開催
　　敎授要目始めて作成

二　天皇皇后兩陛下の御眞影を奉遷改めて御眞影を奉戴す
六　對高工野球定期戰復活、三回戰となる
九　非上龜三敎授渡歐

五　二　日本銀行正貨準備十億圓を割る
　　三　全國失業者三十一萬人と社會局より發表
　　四　失業防止委員會設置
　　五　臨時産業合理局設置
一〇　敎育勅語渙發四十周年記念式典

三　製糸業金休實施（二日）
六　九　獨墺金融大恐慌
　　滿洲事變勃發（十八日）
一〇　日本銀行正貨準備遂に七億圓を割る
一二　金本位離脫（十三日）

四　第一次改正學科課程實施
六　下津居敎授オリムピック參加のため渡米
〃　非上龜三敎授滿洲へ出張
七　下田敎授中南米へ出張
一一　朝香宮殿下御來校遊ばさる（十七日）
一二　小谷重一郎助敎授逝く

七　三　滿洲國建國（九月）
　　五　五・一五事件起る（十五日）
　　七　オリムピック大會ロスアンゼルスに開催
　　〃　オツタワ英帝國會議

八　三　國際聯盟脫退

四　「健康相談」開設

三　外國爲替管理法公布（二十九日）
　　輸出品に對する各國の抑壓愈々加はる

九　五　國民精神文化研究所開設
　　六　文部省思想局設置
　　四　貿易調節及通商擁護法公布（六日）

一〇　八　國體明徴に關し政府聲明（三日）
一二　ロンドン軍縮會議開催
　　農村の疲弊著し

一一　一　ロンドン軍縮會議脱退（十五日）
　　二　二・二六事件起る（二十六日）
　　一一　請學振興委員會開設
　　官立專門學校に日本文化講座開設

一二　三　「國體の本義」刊行
　　七　支那事變勃發（七日）
　　八　暴利取締令公布（三日）
　　〃　上海大山大尉事件

四　内山生徒主事轉任

一〇　就職好轉
　　〃　物故敎職員慰靈祭（十四日）
　　開校十周年記念式擧行、松田文部大臣臨席（二十一日）

七　本校所在地町名中區南太田町は中區清水ケ丘と改稱（一日）
　　〃　金國實業專門學校野球聯盟結成
一〇　國旗目錄刊行
一一　復活第一回大運動會擧行（一日）

一　小宮山敬保敎授逝く
四　古俗敎授轉任
一一　金日本體操祭に賞狀を受く
〃　田尻校長還曆祝賀會開催（二十六日）

三　森田敎授渡歐
四　田尻彦幸助敎授逝く
五　プール開き（三十日）
七　防空聲備規則制定

八　戰局中南支に擴大（九日）
九　〃　臨時資金調整法公布（九日）
　　輸出入品等に關する臨時措置法公布（九日）
一二　〃　南京陷落（十日）

一三　三　〃　獨墺合邦（十三日）
　　七　〃　國家總動員法公布（三十一日）
　　萬國博覽會及オリムピック大會延期に決定
　　支那事變一周年記念日に勅語を賜ふ
一〇　〃　商店法實施（一日）
　　武漢三鎭完全攻略（二十七月）

一四　五　〃　ノモンハン事件勃發（四日）
　　九　〃　〃　青少年學徒に勅語を賜ふ（二十二月）
　　第一四與亞塞公日（一日）
　　英佛對獨宣戰布告、第二次歐洲大戰の發端（三日）
　　價格停止令（十八日）

三　渡邊敎授滿蒙へ出張
七　〃　小白講師、越村助敎授、武田助敎授、野口勝利氏應召
八　田尻校長東大講堂に開催の世界敎育會議に講演す
一一　〃　綜合文化大會開催（六、七日）
　　田尻校長敎育審議會臨時委員仰付らる

三　同窓會を富丘會と命名
四　〃　勤勞報國團結成さる
〃　岡野生徒主事兼敎授轉任
〃　〃　ラジオ體操正課と決定
〃　〃　一年生斷髮實行
六　〃　矢島照書記轉任
七　〃　集團勤勞作業創始
八　〃　金國實專野球大會に優勝す

二　體育優良の表彰狀を文部大臣より受く（十一日）
四　井上總三敎授逝く
五　金國青少年學徒代表に加はり本校生徒代表十名宮城前廣場に於て御親閲を賜ふ
六　與亞青年勤勞報國隊員決定
七　學報第百號記念號を出す

一五 一 日米通商條約失效（二十六日）
四 陸軍適正利潤算定要領を發表（二十一日）
七 奢侈品等製造販賣規則（七・七禁令）公布（六日）
實施（七日）
九 日獨伊三國同盟結成（二十七日）
一〇 大政翼贊會發會式擧行（十二日）
〃 佛印へ進駐
會社經理統制令、銀行等資金運用令實施（二十日）
〃 〃 敎育勅語渙發五十周年記念式典（三十日）
一一 紀元二千六百年式典（十日）、同奉祝會（十一日）
〃 〃 米穀管理規則公布（十、二四）（十一月一日實施）
〃 橫濱沖に特別觀艦式擧行

一六 四 日ソ中立條約成立（十三日）
五 日佛印通商條約成立（七日）
〃 東京港開港（二十日）
六 日獨會商決裂
七 在米日本資金凍結令發表（二十五日）
〃 佛印共同防衛、日佛間に取極められる（二十六日）
〃 〃 英國通商條約廢棄を通告し來る（二十六日）
八 文部省「臣民の道」頒布

一七 一 第一回大詔奉戴日（八日）
二 衣料切符制實施（一日）
〃 シンガポール陷落（十五日）
三 バタビア占領（五日）
〃 ラングーン陷落（八日）
〃 コレヒドール要塞完全攻略（七日）
五 大東亞省開廳（一日）
一一 生産力增强確保政策發表（七日）
〃 第八十一議會召集（二十四日）
一二

一八 一 學制改革勅令公布（二十一日）
〃 實業專門學校を專門學校とす
〃 勤勞緊急對策要綱發表（二十日）

一一 日米交渉最高潮に達す（二十五日頃）
一二 對米英宣戰の大詔渙發さる（八日）
〃 日泰攻守同盟成る（十一日）

一二 〃 賀陽宮殿下御來校遊ばさる（二十四日）
本科第十六回卒業式擧行（二十七日）

三 産業經濟の變革に即應し卒業期繰上に應ずる新學科課程決定
〃 〃 初の勤勞協力令下る
四 〃 マライ語新設さる
五 敎育恭議會の功績により田尻校長賜杯の榮に浴す（五日）
七 夏期鍛錬期間（夏休）短縮さる
〃 〃 黒澤敎授南方へ出張
九 〃 田尻校長勳一等に叙せらる（八日）
〃 〃 田尻校長滿洲國建國十周年記念式典參列（十五日）
一一 〃 本科第十七回卒業式擧行（十六日）
渡邊敎授現職のまま二ケ年間佛印の南方學院へ赴任出發（二十五日）
一二 繰上卒業の對策として十二月中に學年末試驗を行ふ

一 二十年史の編纂決定
〃 新學科課程により三分科制實施
〃 嚴寒に鍛へる、敎室の暖房廢止、寒中體育訓練を行

一一 一 本校出身戰歿者合同慰靈祭擧行（二十五日）
三 紀元二千六百年記念事業の一つとして逗子櫻山地内に報國林を造營す
一〇 田尻校長光井敎授敎育功勞者として褒彰せらる（三十日）・
一一 學友會を解散し報國團を組織す
一二 太平洋貿易研究所設置
〃 文部省綜合視察行はる（十三、四日）

四 〃 本科一學級增設し一學年定員二百名となる
六 〃 南方共榮圈資料目錄第一輯刊行
九 太平洋産業研究叢書第一、第二輯刊行
一〇 報國隊編成式擧行（六日）
二千六百年記念文庫公開
〃 〃 卒業十二月に繰上げ決定につき（十六日）對策を樹つ。十七年度は九月卒業と決定（十一月一日）
一一 體力章檢定大會

〃　日獨日伊經濟協定調印（二十日）
〃　翼鏡工場の管理實施發表（二十七日）
二　出版事業令公布實施（十八日）

ふ
三　入學試驗問題文部省にて統一出題。實業專門學校の入試期日を同一とす（二十三、四、五日）
五　創立二十周年記念式擧行

十五年以上勤續者（昭和十八年五月末日現在）

氏名		任命年月日	在職年月數
校長	田尻常雄	大正一二、一二、一八	十九年六ヶ月
敎授	下田礒佐	〃　一三、一、二二	十九年五ヶ月
同	西村稠	〃　一四、三、三一	十八年二ヶ月
同	南種康博	〃　一五、七、三一	十六年十ヶ月
同	不二門祖哉	〃　一三、四、二一	十九年二ヶ月
同	光井武八郎	〃　一五、三、三一	十七年二ヶ月
同	河村重治郎	〃　一三、五、一七	十九年一ヶ月
同	德增榮太郎	〃　一三、八、三一	十八年九ヶ月
同	時田濟	〃　一三、八、三一	十八年九ヶ月
同	伊東彌	〃　一四、三、一一	十八年三ヶ月
同	大竹綠	〃　一四、九、七	十七年九ヶ月
同	波邊輝一	〃　一三、二、二九	十九年四ヶ月
同	小幡孫二	〃　一三、四、二	十九年二ヶ月
同	井上龜三	〃　一五、三、三一（一三、五、一、一六〇一、三〇一）	十七年二ヶ月
同	森田俊三	〃　一四、三、三一	十八年二ヶ月
同	下津屋俊夫	〃　一三、三、三一	十九年二ヶ月
講師	小白寬	〃　一三、三、三一	十九年二ヶ月
同	山崎與右衛門	〃　一三、四、七	十九年二ヶ月

嘱託	藤田義雄	〃	一四、九、八
書記	齊藤昭之助	〃	一三、一、二三
同	湊川民蔵	〃	一四、二、一八
同	高林義雄	昭和	二、二、一八
同	増田榮吾	大正	一五、四、一〇
鑛夫	鹽田保泰	昭和	二、一、一六
雇員	植岡金次郎	大正	一三、三、三一
同	櫻井巳之吉	〃	一三、四、一〇
守衛	鈴木二郎	〃	一三、六、八
同	増田丑雄	〃	一四、六、一
夫	桐ケ谷留吉	〃	一五、二、一三

十七年九ケ月	
十九年五ケ月	
十八年四ケ月	
十六年四ケ月	
十七年二ケ月	
十六年四ケ月	
十九年二ケ月	
十九年二ケ月	
十八年	
十七年四ケ月	

昭和十八年五月二十日印刷
昭和十八年五月二十七日發行

横濱高等商業學校二十年史

非賣品

編纂兼發行者　横濱市中區滝水丘四十一番地
横濱高等商業學校
代表　德增榮太郎

印刷者　東京市京橋區湊町三丁目十二番地
大壁早治

印刷所　東京市京橋區湊町三丁目十二番地
大倉印刷所

發行所　横濱市中區滝水丘四十一
横濱高等商業學校